



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語から見たゲルマン語（13）：文の構造（付：正誤表2）
Author(s)	清水, 誠; Shimizu, Makoto
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 172, 1（左）-61（左）
Issue Date	2024-03-22
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.172.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91376
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_172_Shimizu.pdf



ドイツ語から見たゲルマン語 (13)

— 文の構造 (付：正誤表 2) —

清 水 誠

German as a Germanic Language (13)

—Sentence Structure—

(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 172.

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.

Sapporo/Japan. 2024. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1. 現代ゲルマン諸語の文の語順—文の領域モデル¹

本稿では、ゲルマン諸語の文の構造をめぐって、定動詞第2位、枠構造、

¹ 本研究は清水 (2019) (2020) (2021a) (2021b) (2021c) (2021d) (2022a) (2022b) (2022c) (2023a) (2023b) の続編であり、科研費の助成による (ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述, 基盤研究 (C) (一般), 19K00540)。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア: アイスランド語, ｱ: アフリカーンス語, 英: 英語, オ: オランダ語, ㇰ: 低地ドイツ語オストファーレン方言, 古高ド: 古高ドイツ語, 古ノ: 古ノルド語, ス: スウェーデン語, セ: 北フリジア語セルリング方言, ㇱ: スイスドイツ語チューリヒ方言, 中英: 中英語, 中高ド: 中高ドイツ語, デ: デンマーク語, ド: ドイツ語, 西フ: 西フリジア語, 西フㇰ: (ベルギー) オランダ語西フランドル方言, ニュ: ノルウェー語ニューノシュク, ブ: ノルウェー語ブークモール, フㇰ: フェーロー語, フㇰ: フランス語, ペ: スイスドイツ語ベルン方言, ペ:

補文標識と一致、動詞群の語順、定形性非対称を取り上げて、順次、論じていく。

1-1. ドイツ語の「定動詞第2位」と枠構造

長らくバッハの作品 (BWV508) と考えられ、1999 年の原典譜発見でバッハと同時代のシュテルツェル (Gottfried Heinrich Stölzel 1690~1749) の作曲と 2017 年に認定されたアリア『あなたがそばにいてくださるなら』(ド *Bist du bei mir*) は、結婚式の席で披露されることも多い歌曲として知られている。

- (1) ド ① *Bist du bei mir*, ② *geh* (= *gehe*) *ich mit Freuden / zum Sterben und zu meiner Ruh* (= *Ruhe*). / ③ *Ach, wie vergnügt wär* (= *wäre*) *so mein Ende*, / ④ *es drückten deine schönen Hände / mir die getreuen Augen zu!* ①あなたが(私の)そばにいてくださるなら / ②喜んで死と安らぎに向かいましょう / ③ああ、(そうならば *so*) 私の最期はどれほど幸せなことか / ④あなたの美しい手が / 一途な私の眼^{まなこ}を閉じてくださるなら

まず、前半の文だが、条件節① *Bist du bei mir* 「あなたがそばにいてくださるなら」と帰結節② *geh ich mit Freuden zum Sterben und zu meiner Ruh* 「私は喜んで死と安らぎに向かいましょう」は、ともに「V (定動詞)+S (主語)」の語順を取っている。①の語順は決定疑問文 (ド *Bist du mir mir?* あなたはそばにいますか?) や命令文 (ド *Sei [du]* (または *Seien Sie*) *bei mir!* そばにいなさい) と同じである。つまり、ドイツ語では定動詞第1位 (verb first) の語順は主節・従属節ともに現れ、決定疑問文、命令文など、話者の気持ちや判断に応じた文の種類、つまり文ムード (sentential mood) とは、本来、無関係であると言える。

ペンシルヴェニアドイツ語、ℳ: 低地 (>中部) ドイツ語ベルリン方言、モ: 北フリジア語モーリング方言、ル: ルクセンブルク語。

同じ条件節でも、帰結節③に後続する条件節④では、es **drückten deine schönen Hände** mir die getreuen Augen **zu** 「あなたの美しい手が一途な私の眼を閉じてくださるなら」のように、文頭に意味のない es が出ている。これは虚辞 (expletive) と呼ばれ、英 **There** is a book on the desk. の英 there と同類である。ただし、ドイツ語の es は、ド **Es** irrt **der Mensch**, solange er strebt. 「人間は努力する限り迷うものだ」(Goethe: *Faust* 317 行) のように、英語の there と違って存在・出現表現に限らず、オランダ語の er と違って、新情報を担う不定主語以外でも現れる (オ |**De mens** dwaalt/* **Er** dwaalt **de mens**| zolang hij streeft. 同上)。英 Yesterday, **it** rained. / ド Gestern regnete **es**. の英 it/ ド es は天候動詞の非人称主語だが、④ **es** drückten deine schönen Hände... の主語は drückten と一致した deine schönen Hände である。また、ド Der Mensch irrt. 「人間は迷うものだ」のように、文中ではこの es は不要である。文頭をふさぐ es と天候動詞の es は別物である²。そこで、①と④は「Ø/es+V+S」にまとまり、①②④の語順は「|Ø/①/es|+V+S」に集約される。

今度は、これを③ Ach, wie vergnügt **wär** so **mein Ende** 「ああ、そうならば私の最期はどれほど幸せなことか」と結びつけてみよう。これは感嘆文だが、疑問文「～どれほど幸せでしょうか？」と同じ語順である。wie 「どれほど」を除けば、Vergnügt **wär** so **mein Ende**. 「そうならば私の最期は幸せでしょうに」という同じ語順の平叙文になり、やはり文ムードとは無関係である。さて、③から ach 「ああ」を除くと、so 「そうならば」をはさんで、「V (wär であることか)+S (mein Ende 私の最期は)」の前に wie vergnügt 「どれほど幸せな」がある。これは虚辞 es と同じ文頭の位置を占める。したがって、①～④はすべて「|Ø/①/es/wie vergnügt|+V+S」のパターンに収まる

² ちなみに、アイスランド語の虚辞 það は動詞や構文の種類に関係なく、主節・従属節の先頭に現れ、それ以外の位置には現れない (ア **Það** rigndi í gær./Rigndi **Ø** í gær?/Ég veit að **það** rigndi í gær. 昨日 (í gær), 雨が降った (það rigndi)/昨日, 雨が降ったの? /私は (ég) 昨日, 雨が降ったことを (að) 知っている (veit), Thráinsson 1994: 170)。イディッシュ語の虚辞 az も同様である (Vikner 1995: 69f.)。

ことになる。

このように、ドイツ語では、主節・従属節、平叙文・感嘆文・疑問文・命令文の区別とは無関係に、「文の語順のパターンはただ1つ」なのである。文の領域モデル（ド topologisches Satzmodell）または領域分析（ド Feldanalyse）に従って、前域（ド Vorfeld）、左枠（ド linke Klammer）、中域（ド Mittelfeld）、右枠（ド rechte Klammer）という領域を設定し、文を輪切りにしてみよう。

- | | | | | | |
|----------|--|--|--|-----------|--|
| (2) ド 前域 | 左枠 | [| 中域 |] | 右枠 |
| ① | <u>Bist</u> | [du bei mir,] | | | _____ |
| ② | Bist du bei mir, <u>geh</u> | [ich mit Freuden zum Sterben und zu meiner Ruh]. | | | _____ |
| ③ | wie vergnügt <u>wär</u> | [so mein Ende,] | | | _____ |
| ④ | es | <u>drückten</u> | [deine schönen Hände mir die getreuen Augen] | zu | _____ |

ここで、次の疑問が浮かぶ。右枠の実体が不明確であり、「V+S」の語順は英語とは逆である。主節②③と従属節①④の混在も気になる。そこで、①④の条件節を従属接続詞ド wenn 「～ならば」で書き換えてみよう（これについては、4-1 で再検討を施す）。

- | | | | | | |
|----------|--|--|----|---|--|
| (3) ド 前域 | 左枠 | [| 中域 |] | 右枠 |
| ⑤ | wenn | [du bei mir] | | | bist |
| ⑥ | wenn | [deine schönen Hände mir die getreuen Augen] | | | zudrückten |

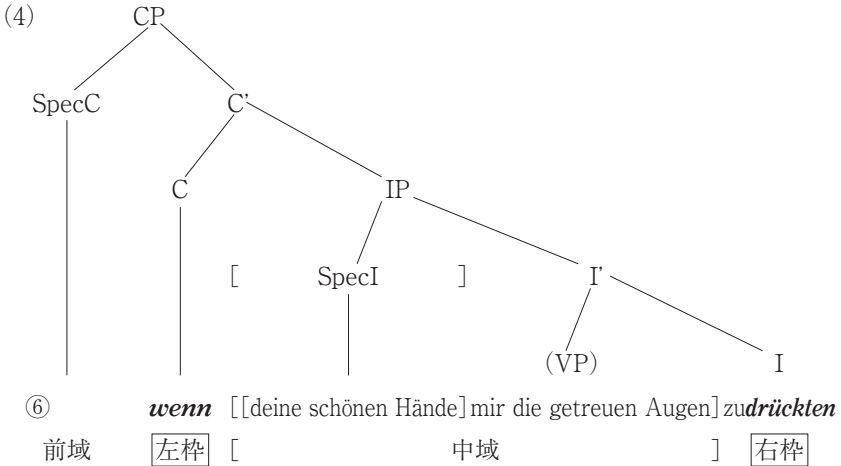
ちなみに、⑤⑥は省略したド wenn 「～ならば」の復元ではない。[[従属節 V+S]+主節 V+S] のつながりには、条件「～ならば～だ」、理由「～だから～だ」、付帯状況「～しつつ～だ」などがある。ここでは、文脈から条件節の解釈が妥当と判断して、wenn を補っている。なお、並列接続詞（ド und/aber/oder/denn）は対象外である。文の語順に影響を与えず、ド du **und** ich 「君とぼく」など、文の接続に限らない。

これで、右枠が定動詞⑤ bist「いる」と⑥ zudrückten「閉じる」(接続法 II 式)で埋まり、「中域+右枠」で「S (du/deine schönen Hände)~V (bist/zudrückten)」の語順に落ち着いた。ただし、S と V の間に副詞句 bei mir「私のそばに」と目的語 mir die getreuen Augen「私の一途な眼を」がはさまっている。そこで、「S (主語)+Adv (副詞句)+O (目的語)/C (補語)+V (定動詞)」となる。詳細は後述するが、この定動詞末尾 (verb final) が基本語順である。「副文 (= 従属節) では主文 (= 主節) の定動詞を文末に後置する」と説くドイツ語教科書が多いが、この立場では種々複雑な問題が生じてしまう。主節の 2 番目以下は「V+Adv+O」(概略) なので、定動詞と最も結びつきが強い目的語が離れるが、従属節では「Adv+O+V」となって隣接する。不変化詞動詞 (分離動詞) も同じである (ド 主節 drückten~zu ↔ 従属節 zudrückten)。言うまでもなく、VO 型の英語とは逆に、ドイツ語は OV 型なのである。

重要なのは、主節の定動詞 bist/zudrückten と従属接続詞 wenn (厳密にはこれとは別の補文標識, 4-1 参照) が左枠を占める点である。一見、異質な両者だが、赤信号と青信号が同時に点灯しないように、相補分布 (complementary distribution) で棲み分けており、これを「定形性非対称」(finiteness asymmetry)³ と言う。左枠に従属接続詞がないときに限って、右枠が本拠地の定動詞は「家族」を残して、左枠に「単身赴任」するのである。たとえば、④ es **drückten** deine schönen Hände / mir die getreuen Augen **zu** の zu は、不変化詞動詞 (分離動詞) zudrückten (←zu | drücken 閉じる) の不変化詞 (分離成分) だが、文末の右枠に残り、動詞 drückten だけが 2 番目の左枠に移っている。これに前域を加えると、「定動詞第 2 位」(verb second) になる。以上が枠構造 (ド Klammerstruktur/Rahmenstruktur) と呼ばれるドイツ語の語順のエッセンスである。

これを生成文法の分析に当てはめてみよう。動詞句 (VP) の内部は省略する。表面的な文のスケッチにとどめ、後述する移動の中身も省くことにする。

³ 「定性」(限定性 definiteness) と区別して、「定形性」(finiteness) とする。



「中域 + 右枠」は屈折句 (IP, inflection phrase)⁴にあたる。これは時制・ムード (法)・一致という屈折要素 (I) を主要部とするまとまりであり、これによって主述関係 (predication) が決まる。中域の主語は IP の指定部 (Spec) が基本だが、「Adv (so) + S (mein Ende)」(←S (mein Ende) + Adv (so)) のような「かきまぜ」も起こる。「前域 + 左枠」が加わると、補文標識句 (CP, complementizer phrase) になり、話者の気持ちや判断を反映する文の種類 (文ムード) が決まる。従属接続詞 (*wenn* の位置は 4-1 で再検討) は補文標識 (C)、前域はその指定部 (Spec) を占める。右枠は動詞群の位置であり、そこから定動詞が左枠に移るのは、屈折句 (IP) の主要部 (I) から補文標識句 (CP) の主要部 (C) への移動に相当する。日本語では、「[何 [か]] がある」に対して「[[何] があるの] [か]」のように、「か」が文末の右端に動くと、「何」の内容を問う選択疑問の意味が生じる。ドイツ語では、ド *Dort kannst du was erleben*。「あそこでは君は何かを (was) 体験できる」に対して、ド *Was kannst du dort erleben?*「君はあそこで何を (was) 体験できるか」のように、*was* を文頭の左端に移動することで、同じ効果が得られる。文ムードの鍵を

⁴ 時制句 (TP, tense phrase) の代わりに用いる。

握るこの部分を左周辺部 (left periphery) と言う。文ムードを決める発話力 (illocutionary force) の種類は多彩だが、詳細は割愛する。

1-2. 前前域, 後域, 「枠越え」

「定動詞第2位」に基づく枠構造は、大多数の現代ゲルマン諸語に共通している。ドイツ語原典を頼りに、オランダ語訳を読み解いてみよう。左枠の棲み分けに従って、「従属接続詞 als (ド wenn)～定動詞」となる (① オ als～bent (ド bist), ④ オ als～zouden₁ sluiten₂ (ド schließen₂ würden₁ / 英 should₁ shut₂))。

- | | | | | | | |
|-------|-------------------------|--|---|---------------------------|---|--|
| (5) オ | 前域 | 左枠 | [| 中域 |] | 右枠 |
| ① | | Als | | [jij bij mij] | | bent |
| ② | (Als jij bij mij bent,) | | | | | |
| | dan | <u>ga</u> | | [ik met vreugde naar de | | |
| | | | | dood en naar mijn rust] | | _____ |
| ③ | (Ach,) hoe aangenaam | <u>zou</u> | | [mijn einde] | | _____ zijn |
| ④ | | als | | [jouw mooie lieve handen] | | |
| | | | | mijn trouwe ogen] | | zouden sluiten! |
- (https://nl.wikipedia.org/wiki/Bist_du_bei_mir, 2023.6.9 閲覧)

②の条件節に注目されたい。オ als jij bij mij bent 「あなたが (jij) 私のそばに (bij mij) いてくださる (bent) なら (als)」を dan 「そうならば」で受けている。前域の dan の前に置かれた als-従属節の位置を前前域 (ド Vorvorfeld) と言う。「ド wenn-従属節+dann+定動詞」の wenn-従属節も同様である。

- | | | | | | | |
|---------|----|--|------------|------------------|----------------------------------|--|
| (6) 前々域 | 前域 | 左枠 | [| 中域 |] | 右枠 |
| ⑦ | オ | [Als jij bij mij bent,] | dan | <u>ga</u> | [ik met vreugde naar de dood...] | _____. |

- ⑧ ド [*Wenn du bei mir bist*,] *dann* geh [ich mit Freuden zum Sterben...] ____.

前域の前には譲歩節も位置する：ド [*Auch wenn du nicht bei mir bist*], *ich* geh mit Freuden zum Sterben und zu meiner Ruh. 「たとえあなたがそばにいてくださらなくても (auch wenn), 私は喜んで死と安らぎに向かいましょう」。

右枠の後ろには、後域 (ド Nachfeld) もある。これは中域の肥大化を避けて、スリムにするべく取り出した句や節の行き先である。右枠を越えるので、「枠越え」(枠外配置, ド Ausklammerung) と言い、オランダ語ではドイツ語よりも頻繁に起こる。動詞と結びつきが強い名詞句主語や目的語は対象外である。逆に、主語や目的語としてはたらく従属節は、原則としてかならず「枠越え」するか、前域に移動させる。中域に残ると、主節の解釈が終わる前に従属節の解釈が始まる中央埋め込み (center embedding) になるので、好まれない。

- (7) 前域 左枠 [中域] 右枠 後域

ド *Ich kann [mir *dass du bei mir bist* nicht] vorstellen.

Ich kann [mir _____ nicht] vorstellen [*dass du bei mir bist*].

私は「あなたがそばにいてくださることを」想像できません

1-3. 英語の文構造—「定動詞第2位」と枠構造の不在

これに対して、英訳はまったく別の様相を呈している。

- (8) 英 ① If *you are* with me, / ② then *I will go* gladly /unto [my] death and to my rest. / ③ Ah, how pleasing *were my end*, / ④ if *your dear hands* then / *shut* my faithful eyes !

(https://en.wikipedia.org/wiki/Bist_du_bei_mir, 2023.6.9 閲覧)

①②④は主節，従属節ともに「S+V」の語順であり，「定動詞第2位」とは無縁である。それでも，感嘆文の③は「(how pleasing+) V (*were*) + S (*my end*)」となっている。how を除いて平叙文にすれば，*My end were* pleasing. となる。強引に(5)のモデルに押し込めば，[How pleasing (前域)] [*were* (左枠)] [*my end* _____ (中域)]. は「前域+左枠」を含むが，how を除いた移動前の *My end were* pleasing. は中域だけに収まる。

おおまかに言うと，英語の平叙文は中域という「箱」だけで成立し，疑問文やそれと同じ語順の感嘆文になって，前域と左枠の「箱」が開く。これに対して，ドイツ語やオランダ語の文では，つねに右枠を含むすべての「箱」が全開している。ドイツ語やオランダ語は「一連の開かれた箱を満たす」パターン，英語は「必要に応じて箱を開いて満たす」パターンと言えるだろう。

より射程の広い(4)の生成文法の分析に当てはめると，3言語の例は統一的に把握できる。まず，OV型のドイツ語とオランダ語に対して，英語はVO型なので，動詞句(VP)と屈折句(IP)の内部の語順が変わる。次に，ドイツ語とオランダ語の①～④は補文標識句(CP)だが，英語の②平叙文は屈折句(IP)の段階にとどまり，③感嘆文で補文標識句(CP)に達する。助動詞は補文標識の位置(C/左枠)に移動するが(英 [Why [can]_C [you _____ [not *come*]_{VP}]_{IP}CP?)，本動詞は屈折句(IP)内の屈折辞(I)の位置には移らず，否定文ではdoでふさぐ(英 [You [did]_I [not _____ *come*]_{VP}]_{IP})。doは補文標識句(CP)でも補文標識の位置(C)に移動し，「S+V」の語順が確保される(英 [Why [did]_C [you _____ [not _____ *come*]_{VP}]_{IP}CP?) (他の移動の痕跡は省略)。

英語のパターンは次のフランス語訳と似ている(ただし，③も「S+V」の語順を示す)。

- (9) 7a ① Si *tu restes* avec moi, / ② alors *j'irai* en joie / Vers ma mort et mon doux repos. / ③ Ah! comme *elle serait* heureuse, ma fin, / ④ *Tes jolies mains fermant* mes yeux fidèles! ①あなたが (tu) 私のそばに (avec moi) いてくださる (restes) なら (si) / ②そうならば (alors) 喜んで (en joie) 死と安らぎに (vers ma mort et mon doux

repos) 私は向かいましょう (j'irai) / ③ ああ (ah), 私の最期は (elle~ma fin, ド sie~mein Ende/ 英 it~my end) どれほど幸せな (comme~heureuse) ことか (serait) / ④ あなたの麗しい手が (tes jolies mains) / 一途な私の眼を (mes yeux fidèles) 閉じてくださるなら (fermant, ド zudrückend/ 英 shutting)

(https://fr.wikipedia.org/wiki/Bist_du_bei_mir, 2023.6.9 閲覧)

シェイクスピアが活躍した 1600 年頃の初期近代英語までは、英語も「定動詞第 2 位」に準じた語順が主流だった (Radford et al. 2009²: 314-325)。その後、助動詞 do の発達 (橋本 2005: 169) に見られるように、英語は大多数のゲルマン諸語に共通のパターンから逸脱していった。類例はイタリア北東部の上部ドイツ語ツインバーン方言 (チンプロ方言) で、「定動詞第 2 位」の (表面的な) 不在が観察される。同方言はイタリア語から多大な影響を被った (Cognola 2013, Putnam (ed.) 2011: 231-367, Bidese 2008)。スラヴ語との関係が問われるイディッシュ語も枠構造を欠いている。

1-4. 前域と中域—情報伝達のしくみと「見えない疑問詞」

上述のように、左枠と右枠は定動詞と従属接続詞 (厳密には補文標識) という機能語 (主要部) の指定席である。定動詞は時制・ムード (法)・一致という機能的素性を音形として実現する語であり、従属接続詞は 4-1 で述べるように、従属節を導く機能的要素の補文標識を内蔵している。一方、前域はそうした機能とは無縁の複数の語からなる 1 つの句 (構成素 constituent) が占める位置であり⁵、中域には残りの句が並んでいる。互いに性格が違うのである。

統語的な機能的領域である左右の枠に対して、前域と中域には情報伝達を司る語用論的な役目がある。ここで、ドイツ語の文を「家」にたとえてみよ

⁵ ド gestern auf der Schule 「昨日、学校で」などの複合副詞句やド heute am 15. August 「今日、8月15日に」などの同格による拡大表現は、1つの句とみなされる。

う。左枠と右枠は土台を支える 2 本の「大黒柱」、前域は「玄関」、中域は「家族」が集う広い「居間」にあたる（前々域と後域は省略）。

(10) 前域	左枠	[中域]	右枠
ド (話題/強調・対比)		(主語 + 副詞句 + 目的語/補語)	
⑨ (Sie behauptet,)	<u>dass</u>	[Hans jeden Tag Deutsch]	<i>gelernt hat.</i>
⑩ Hans	<u>hat</u>	[_____ jeden Tag Deutsch]	<i>gelernt ____.</i>
⑪ Deutsch	<u>hat</u>	[Hans jeden Tag _____]	<i>gelernt ____.</i>
⑫ Jeden Tag	<u>hat</u>	[Hans _____ Deutsch]	<i>gelernt ____.</i>
⑬ Gelernt	<u>hat</u>	[Hans jeden Tag Deutsch]	_____ ____.

ハンス (男名) は毎日、ドイツ語を学んだと (彼女は主張している)

出発点は⑨の従属節である。⑩～⑬の主節では、完了の助動詞 *hat* が右枠から空席となった左枠に移動して、「定動詞第 2 位」となる。下線 (____) はその痕跡である。点線 (_____) は中域 (⑬は右枠) から前域に出した要素の痕跡であり、その選択は先行する内容で決まる。基本的に、⑩は「ハンスはどうしたの?」という問いへの回答である。⑪は「ドイツ語は?」、⑫は「毎日って?」と聞かれたときの受け答えである。このように、前域は既知の旧情報 (old information)、つまり話題 (topic) の位置で、未知の新情報 (new information) は中域でコメントを施す。「宅急便」 (= 先行内容) が届いたら、「受取人」 (= 話題) が「居間」 (= 中域) から「玄関」 (= 前域) に出て応対すると考えればよい。

先行文との関係とは別に、前域に強い強勢を置いて強調や他者との対比を表すこともある。⑬ *Gelernt* hat Hans jeden Tag Deutsch *nicht*. 「ハンスは毎日、ドイツ語を学んだわけではない」では、右枠から移動した過去分詞 *gelernt* 「学んだ」が否定の焦点である。いわば「来客」 (= 強調・対比) に対して、「家族」 (= 前域/強勢) を紹介するのに似ている。

文の領域モデルは生成文法の分析と違って、普遍性を志向するものではない。しかし、統語論的な「定動詞第 2 位」と語用論的な情報伝達を基盤とし

た大多数の現代ゲルマン諸語の文のしくみを理解するには、有効な方策である。次に、疑問詞疑問文と二者択一の決定疑問文を比較してみよう。

- (11) ド 前域 左枠 [中域] 右枠
- ⑭ Was hat [Hans jeden Tag] **gelernt** ____ ?
- ⑮ Ø (=Q) Hat [Hans jeden Tag Deutsch] **gelernt** ____ ?

ハンスは毎日、何/ドイツ語を学んだのですか

⑭の疑問詞疑問文では、前域に疑問詞 was「何を」があるが、⑮の決定疑問文では、空白 (Ø) のように見える。*Bist du* bei mir (= (1)①) には、本来、条件節「あなたがそばにいてくださるなら」と決定疑問文「あなたはそばにいますか?」の解釈が可能であり、ともに「V+S」の語順になっている。どこが違うのだろうか。その手がかりは、次のアイスランド語と古ノルド語の例にある。

- (12) ア *Hvort* eigum við að fara út í það í kvöld eða á morgun ? 私たちは (við) 今晚 (í kvöld) または (eða) 明日 (á morgun) のどちらに (hvort) それに乗って出かけようか (eigum~að fara út í það)
(Einarsson 1949²: 194)
- (13) ア Spyrðu *hvort* hann sé heima. 彼が (hann) 自宅に (heima) いる (sé) か (hvort) 聞いてください (spyrðu)
(Árnason (útg.) 2003²: 684)
- (14) 古ノ *Hvárt* er Qnundr sjóni hér í þingbrekkunni ? 眼王のオヌンドル (男名) は (Qnundr sjóni) この民会の丘に (hér í þingbrekkunni) いる (er) か (hvárt) (*Egils saga Skalla-Grimssonar*, Chap. 81)
- (15) 古ノ “Brátt mun þat,” segir Egill, “ljóst verða, *hvárt* þú mælir þetta af alvöru eða hégóma, 「すぐに (brátt) それは (þat) はっきりする (ljóst verða) だろう (mun)」とエギルは (Egill) 言った (segir 歴史的現在)。「おまえが (þú) このことを (þetta) まじめに (af

alvöru) か (eða) 嘘をついて ([af] hégóma) 言っている (mællir)
かどうか (hvárt)」 (ib.)

両言語は VO 型だが、3-1 で述べるように、「定動詞第 2 位」の原則は北ゲルマン語にも共通している。ア hvort/古ノ hvárt 「2つのどちら；～かどうか」は疑問代名詞双数形にさかのぼるア hvor/古ノ hvárr の単数中性形で、英 whether にあたる。しかし、英 whether 「～かどうか」は間接疑問文に限られ、直接疑問文には使わない。それでも、英語の直接疑問文の前域にも、疑問文という文ムードを特徴づける発話力に牽引された二者択一を問う「見えない疑問詞」(Q) があると考えられる。ア hvort/古ノ hvárt はそれが音声的に実現した例なのである (清水 2013: 51a)。ドイツ語の⑭⑮もこれとの類推で捉えられる。一方、1-1 で紹介した条件節④では、ド *es drückten deine schönen Hände / mir die getreuen Augen zu* 「あなたの麗しい手が / 一途な私の眼を閉じてくださるなら」のように、空席の前域をふさぐ虚辞 *es* が出ている。これは、疑問文という文ムードを伴う節ではないことを物語っている。

2. 中域の語順

2-1. 「かきまぜ」と「ヴァカーナーゲル位置」

次に、中域の語順を検討しよう。前述の「S + Adv + O/C」は素朴な概略で、実際には次の要因によって語順にヴァリエーションが生じる。次例は典型的な二重他動詞 (ditransitive / bitransitive (verb)) の場合である。

- (16) (a) 主格主語 (動作主) > 与格目的語 (受益者) > 対格目的語 (被動者),
(b) 旧情報 (テーマ Thema) > 新情報 (レーマ Rhema), (c) 定 > 不定, (d) 代名詞 > 非代名詞, (e) 有生 > 無生, (f) 無強勢 > 強勢, (g) 短 > 長

与格目的語と対格目的語の語順を中域内の「かきまぜ」(scrambling) の観

点から検討しよう。次例の新情報（レーマ）は疑問詞で問われた名詞句である。「+」は (a) ((e) を含む) ~ (c) に合致する場合, 「-」はしない場合である。

- (17) ド Was hat Kim dem Jungen geschenkt? 何をキムは男の子に贈ったの

① Kim hat **dem Jungen ein Bilderbuch** geschenkt.

((a) + (b) + (c) +)

② ?? Kim hat **ein Bilderbuch dem Jungen** geschenkt.

((a) - (b) - (c) -)

キムは男の子に絵本を贈った ((18)①②も同様)

- (18) ド Wem hat Kim ein Bilderbuch geschenkt? だれにキムは絵本を贈ったの

① Kim hat **dem Jungen ein Bilderbuch** geschenkt.

((a) + (b) - (c) +)

② ? Kim hat **ein Bilderbuch dem Jungen** geschenkt.

((a) - (b) + (c) -)

(17)①は (a)~(c) に合致しており, 最も自然である。(18)①の dem Jungen + ein Bilderbuch の語順は, (b) に反して「新情報（レーマ）+ 旧情報（テーマ）」だが, (a) と (c) は満たしているので, まだそれほど悪くない (dem は指示代名詞ではなく, 定冠詞の場合である)。しかし, (18)②の ein Bilderbuch + dem Jungen の語順は, (a) に反して「対格目的語 + 与格目的語」であり, (c) にも反して「不定 + 定」なので, 少し不自然である。(17)②の ein Bilderbuch + dem Jungen の語順は, さらに (b) にも反して「新情報（レーマ）+ 旧情報（テーマ）」なので, かなり不自然になる。それでも意味は通じないことはなく, ein Bilderbuch に強調・対比の強勢を置けば自然になる。このほかに, 心理動詞や非対格動詞, 述語形容詞の種類によっても, 認容度は変わってくる。

(d) 「代名詞＞非代名詞」の基準についてだが、これは無強勢の弱代名詞 (weak pronoun) が中域の主語の前に置かれる傾向にも反映している。

- (19) ド Warum hat [[es ihr] niemand _____] gesagt? なぜそれを (es) 彼女に (ihr) だれも (niemand) 言わなかったのですか
- (20) ド Weißt du, warum [[es ihr] niemand _____] gesagt hat? なぜそれを (es) 彼女に (ihr) だれも (niemand) 言わなかったのか、君は知っていますか
- (21) ド Am Herd haben [[sich] die Schüler _____ die Finger] verbrannt. かまどで生徒たちが指をやけどした (sich die Finger vrebrennen 指をやけどする)
- (22) ド Ich weiß nicht, ob [[sich] die Schüler _____ am Herd die Finger] verbrannt haben. かまどで生徒たちが指をやけどしたかどうか、私は知らない

問題の弱代名詞は、波線 (_____) をつけた位置から中域の左端に出て、左枠に寄り添っている。これも「かきませ」の一種である。「定動詞/従属接続詞＋代名詞」は続けて発音し、[hat es sich] / [warum es sich] niemand, [haben sich] / [ob sich] die Schüler と区切る。この配列は義務的ではないが、より自然である。「よちよち歩きの赤ん坊」が左枠という「大黒柱」につかまると考えればいいだろう。中域の左端に置かれた弱代名詞の位置を「ヴァカーナーゲル位置」(ド Wackernagel-position) と言う。これは、「自立的強勢を欠く要素は、文の2番目の位置に置かれる」という古い印欧語の語順の傾向を一般化したヴァカーナーゲルの法則 (Wackernagel's law) にちなむ名称である。ちなみに、ヴァカーナーゲル (Jacob Wackernagel 1853～1938) はスイスの印欧語学者である。「定動詞＋人称代名詞主格」での異分析もこれと関係がある (ド du kommst (V-st<古高ド V-s+dū), ル dir kommt (dir< V-t+ir) など)。

2-2. ドイツ語とオランダ語の代名詞の語順—話題卓越性から主語卓越性へ

「定動詞第2位」とOV型の枠構造がドイツ語と共通のオランダ語では、「ヴァカーナゲル位置」はあっても、あまり目立たない。たとえば、「代名詞't (←het, 英 it) + 再帰代名詞 zich」(ド's (←es) sich) が「ヴァカーナゲル位置」に置かれた(24)は、ごちちなく不自然に響く(Rijpma/Schuringa 1978²⁵: 238)。なお、オランダ語ではドイツ語よりも格変化が衰退している。

- (23) オ Later kon [*mijn vader 't zich* meestal niet meer] herinneren. 後で
(later) 私の父は (mijn vader) たいてい (meestal) それを ('t←het)
もう (meer) 思い出す (zich 再帰代名詞～herinneren) ことができ
なかった (kon～niet)
- (24) オ ⁽²⁾ Later kon [*'t zich* *mijn vader* meestal niet meer] herinneren.
同上

動詞の種類などにもよるが、オランダ語では、代名詞も中域で「主語＋代名詞目的語」の語順を保つのが自然である。逆に、ドイツ語で自然なのは、「ヴァカーナゲル位置」に置かれた代名詞が主語に先行する「代名詞目的語＋主語」の語順である。

- (25) オ Voor de tweede keer bedroog [*zijn vriend hem*]. 2度目に (voor de tweede keer) 彼の友人は (zijn vriend) 彼を (hem) 裏切った (bedroog) (Van Dam 1972: 101)
- (26) ド Zum zweiten Mal betrug [*ihn sein Freund*]. 同上 (ib. 101)
- (27) オ Toen was [*de stad hem* al uit boeken] bekend. 当時 (toen) その町は (de stad) 彼には (hem) すでに (al) 本から (uit boeken) なじみがあった (知られていた was～bekend) (ib. 101 変更)
- (28) ド Damals war [*ihm die Stadt* bereits aus Büchern] bekannt. 同上 (ib. 101 変更)
- (29) オ Tegelijk hield [*het besef dat dwars door het, ooit door miljoenen*

aanbeden, omhulsel het skelet schemerde], [*haar*] in een voortdurend staat van opwinding]. 同時に (tegelijk) [かつて (ooit) 何百万もの人々に (door miljoenen) 崇拝された (aanbeden) 体という覆いを (omhulsel) じかに (dwars) 通して (door) 骨格が (het skelet) ほのかに見えた (schemerde) という意識が (het besef)] [彼女を (haar)] 覚めやらない (voortdurend) 興奮の (van opwinding) 状態に (in een staat) とどめていた (hield) (haar は代名詞基本形, 弱代名詞は ze [zə]) (Shannon 2000: 171)

- (30) ド *Zugleich hielt [sie] [*das Bewusstsein, dass durch die einst von Millionen Menschen angebetete Hülle das Skelett schimmerte*], in einem Zustand ständiger Aufregung.* 同上
(ib. 171 変更)

中期オランダ語では、中域の語順は今よりも自由だった。ドイツ語も中高ドイツ語では、中域の語順の自由度はやや高かったようである (Shannon 2000: 174-177)。中域の語順の固定化がオランダ語でとくに強まった理由には、現代英語と似た格語尾の衰退が挙げられる。両言語ともに中域の語順の決定には、語用論的要因から統語論的要因へのシフトが認められ、その度合いは形態の簡素化が進んだオランダ語のほうが強いようである。これは話題卓越性 (topic prominence) から主語卓越性 (subject prominence) への移行とも関連している (Shannon 2000: 192-194)。虚辞のド es/オ er の相違も、その反映かもしれない。次例のオ er は、中域内の位置が決まった主語が空白となったのを補填しているように見える。中域の主語の位置が相対的に不確定なドイツ語では、es にこの用法は認められない。

- (31) オ Vanavond komen *er vijf gasten*. 今晚 (vanavond) お客さんが 5 人 (vijf gasten) 来ます (komen er)
(32) オ *Hoeveel gasten* komen *er* vanavond? 今晚, 何人お客さんが (hoeveel gasten) 来ますか

- (33) オ *Hoeveel gasten* denk je dat *er* vanavond komen? 何人お客さんが
今晚、来ると (dat) 君は (je) 思いますか (denk)

2-3. 「埋め込み節の話題化」と話法詞・心態詞

(1)③ド Ach, wie vergnügt wär *so mein Ende* 「ああ、そうならば私の最期はどれほど幸せなことか」を思い出していただきたい。中域の主語 *mein Ende* 「私の最期は」の前に *so* 「そうならば」が置かれている。これは「ヴァカーナーゲル位置」とは異なる。前域以外に中域の先頭にも話題が置かれるのである。同様の語順は、前域以外に発言・思考動詞が導く従属節でも見られ、これを「埋め込み節の話題化」(embedded topicalization)と呼んでいる(6-2 参照)。(34)の主節に対して、ド *sagen* 「言う」に埋め込まれた(35)ド *im Anfang* 「初めに」がそれで、従属節で中域の先頭に出ている。従属接続詞を欠いた(36)では、前域の位置を占めている。

- (34) ド *Im Anfang* war das Wort. 初めに言葉ありき
(35) ド Der Beginn des Johannesevangeliums sagt, [dass *im Anfang* das Wort war]. ヨハネの福音書の冒頭は初めに言葉ありきと謳っている
(Musan 2010: 36 変更)
(36) ド Der Beginn des Johannesevangeliums sagt, [*Ø im Anfang* war das Wort]. 同上

ドイツ語では、従属接続詞 *dass* 「～ということ」があると、定動詞は文末の右枠にとどまり、主節の語順にはならない。ただし、6-2 で述べるように、西フリジア語の *dat*-主節など、この原則を破る現代ゲルマン語の例は存在する。

語順の自由度が高いドイツ語の中域では、左側の旧情報(テーマ)に右側の新情報(レーマ)が続く。その境界に位置するのが、話者の気持ちや判断を表す話法詞(ド *Modalwort*)である。話法詞は新情報(レーマ)の開始を示す役割を担うことがある。次例の話法詞は、ド *anscheinend* 「どうやら」

である。

- (37) ド Laut dem Johanneſevangelium war [***im Anfang anscheinend*** das Wort]. ヨハネの福音書によれば、初めにはどうやら言葉があったらしい
(Musan 2010: 36)

中域の語順がドイツ語ほど自由ではないオランダ語でも、この点は同じである (Van der Wouden 2009³: 125)。次例は、日本語の終助詞「ね、さ、よ」にあたる心態詞 (ド Abtönungspartikel) の場合である (清水 2019b: 284-288)。オ *maar eens* 「(ちょっと)～よ」のように、重ねて使うこともかなり頻繁に見られるが、それに続く部分が短くなるにつれて、新情報が限定されていく。(38)は「私が (ik) しないといけない (moet) のは、[6 時に (om zes uur) 娘を (mijn dochttertje) ピアノ教室に (van de pianoles) 迎えに行くこと (ophalen)]」, (39)は「6 時にしないといけないのは、[娘をピアノ教室に迎えに行くこと]」, (40)は「6 時に娘にしないといけないのは、[ピアノ教室に迎えに行くこと]」を表す。

- (38) オ Ik moet *maar eens* [om zes uur mijn dochttertje van de pianoles ophalen]. 私は 6 時に娘をピアノ教室に迎えに行かないといけないのよ
- (39) オ Ik moet [om zes uur] *maar eens* [mijn dochttertje van de pianoles ophalen].
- (40) オ Ik moet [om zes uur mijn dochttertje] *maar eens* [van de pianoles ophalen].

3 北ゲルマン語の語順

3-1. 「定動詞第 2 位」と OV 型/VO 型枠構造

ゲルマン諸語の大多数が「定動詞第 2 位」の原則による枠構造を基本とす

る事実、十分に認知されていないようである。『言語学大辞典第6巻術語編』（三省堂1996）の次の記述は、その一例と言える。

- (41) 「英語を含めた大部分のゲルマン語は、〈中略〉その基本語順はきわめて厳格な SVO 型の言語となっている」

（言語学大辞典第6巻術語編 1996: 990）

- (42) 「このような枠構造と従属文での SOV 語順は、ドイツ語、オランダ語ではまだ維持されているが、英語およびスカンジナビアの北欧語では、〈中略〉枠構造は解消され、動詞第2位置の原理が確立された」

(ib. 991)

(41)が誤りなのは明らかである。(42)「動詞第2位置の原理が確立された」も、「基本語順がきわめて厳格な SVO 型」が正しくないので、誤記である。さらなる誤解は、「スカンジナビアの北欧語では、〈中略〉枠構造は解消され、動詞第2位置の原理が確立された」、つまり、英語と同じ「SVO 型」であり、枠構造を欠くという点である。以下では、これを正した次の2点を検証してみよう。

- (43) ① 北ゲルマン語（いわゆる北欧語）の語順は、英語とは異なり、他の西ゲルマン諸語の大多数と同じく「定動詞第2位」を基本とする。
② 大多数の西ゲルマン諸語に共通する「OV 型枠構造」に対して、北ゲルマン語は「VO 型枠構造」を有している。

一例として、新約聖書『マタイによる福音書』第5章第4節の『山上の垂訓』（ド *Bergpredigt*）に先立つ箇所を取り上げよう。この箇所は、4-2の補文標識をめぐる説明でも援用する。次例は、大陸北ゲルマン語からニューノシュク訳（*Bibelen* 1986³: 新約4）、離島北ゲルマン語からアイスランド語訳（*Biblian* 2007: 新約8）からの引用である：「イエスは²群衆を⁴ご覧になった³ときに¹、彼（＝イエス）は⁶山に⁷登られた⁵。そこに⁸彼（＝イエス）は¹⁰おす

わりになり⁹, そして¹¹(彼の)弟子たちが¹² みもとに¹⁴ 集まった/やって来た¹³」。

前域 (話題/強調・対比)	左枠 (主語)	中域	右枠 (目的語/補語 + 副詞句)	後域
(44) ニ Da ¹	Ø	[Jesus ²]	såg ³	[folkehopen ⁴], Da ¹ Jesus ² såg ³ folkehopen ⁴ , gjekk ⁵ [han ⁶] ____ [opp i fjellet ⁷ ____]. Der ⁸ sette ⁹ [han ¹⁰] ____ [seg ⁹], (og ¹¹) læresveinane ¹² samla ¹³ [____] ____ [seg ¹³ om han ¹⁴].
(45) ア þegar ¹	Ø	[Jesus ²]	sá ³	[mannfjöldann ⁴] þegar ¹ Jesus ² sá ³ mannfjöldann ⁴ gekk ⁵ [hann ⁶] ____ [upp á fjallið ⁷ ____]. Þar ⁸ settist ⁹ [hann ¹⁰] ____ [____] (og ¹¹) lærisveinar hans ¹² komu ¹³ [____] ____ [til hans ¹⁴].

従属接続詞 (ニ da¹ / ア þegar¹ ～したときに) に導かれた従属節では、定動詞 (ニ såg³ / ア sá³ 見た) は右枠にとどまる。それを欠く主節では、右枠の定動詞 (ニ gjekk⁵ / ア gekk⁵ 登った, など) が左枠に移動し、話題となる要素が中域または後域から前域に移る。このように、両言語の語順は枠構造と「定動詞第2位」が基本であり、英語の SVO 型とは異質である。西ゲルマン語との相違は、「目的語/補語 + 副詞句」が後域に規則的に「枠越え」している点にある。

次は「イエス (彼) は² 群衆/人々を⁴ ご覧になった³ ときに¹, 彼 (イエス) は⁶ 山に⁷ 登られた⁵」(英 seeing (when he saw) the multitudes, he went up into a mountain) の比較例である (文頭は大文字, 文末はピリオドで統一)⁶。

⁶ スウェーデン語 (Bibeln 1981/82: 新約 11), デンマーク語 (Bibelen 1998: 1044), ブークモール (Bibelen 1987⁴: 新約 4), フェーロー語 (Biblia 1983: 新約 4), ドイツ語 (Die Bibel 1984: 新約 6), 低地ドイツ語オストファーレン方言 (De Plattduitsche Baibel 1997: 652), ルクセンブルク語 (D'Evangelium nom Matthäus 2018: 26), スイスドイツ語チューリヒ方言 (s Nöi Teschtamänt Züriiütsch 1997: 5), ペンシルヴェニアドイツ語 (Es Nei Teschtament 1993: 12), オランダ語 (Groot Nieuws Bijbel 1999: 新約 5), アフリカーン

I. 北ゲルマン語：定動詞第2位 VO型枠構造 ((44)ニユ/(45)ア参照)

- (46) ス När¹ han² såg³ folkskarorna⁴, gick⁵ han⁶ upp på berget⁷.
 (47) デ Da¹ Jesus² så³ skarerne⁴, gik⁵ han⁶ op på bjerget⁷.
 (48) ブ Da¹ Jesus² så³ folkemengden⁴, gikk⁵ han⁶ opp i fjellet⁷.
 (49) フェ Tá ið¹ hann² sá³ mannamúgvurnar⁴, fór⁵ hann⁶ niðan á fjallið⁷.

II. 西ゲルマン語：定動詞第2位 OV型枠構造

- (50) ド Da¹ er² aber das Volk⁴ sah³, ging⁵ er⁶ auf einen Berg⁷.
 (51) オ As¹ Jesus² de vielen Minschen⁴ sach³, ging⁵ hei⁶ up en Barg⁷.
 (52) ル Wéi¹ de Jesus² déi vill Leit⁴ gesinn huet³, ass⁵ hien⁶ de Bierg⁷
 eropgaang⁵.
 (53) フ Won¹ er² aber die vile Lüüt⁴ gsee hät³, isch⁵ er⁶ uf de Bèèrg⁷ ue⁵.
 (54) ペ Vo¹ Jesus² dee feel leit⁴ ksenna hott³ is⁵ eah⁶ nuff uf en hivvel⁷
 ganga⁵.
 (55) オ Toen¹ Jezus² al die mensen⁴ zag³, ging⁵ hij⁶ de berg op⁷.
 (56) フ Toe¹ Jesus² die menigte mense⁴ sien³, het⁵ Hy⁶ teen die berg⁷
 opgegaan⁵.
 (57) 西フ Doe't¹ Er² de mannichte⁴ seach³, gong⁵ Er⁶ de berch op⁷.
 (58) モ As¹ hi² ââl da manschne⁴ sâch³, gâng⁵ hi⁶ ap⁵ önj e bärje⁷.
 (59) セ Diär¹ Jesus² di Kär Lid⁴ saag³, ging⁵ hi⁶ âp⁵ üp en Bârig⁷.

これに対して、「北ゲルマン語の枠構造は主語しかはさんでいないのではないか」というクレームが出されるかもしれない。そこで、デンマークの言語学者ディーゼリクセン (Paul Diderichsen 1905~1964) が提唱した文図式 (デ sætningsskema) または領域図式 (デ feltskema) を移動の痕跡 (下線部) を加えて紹介しよう (Diderichsen 1976² (1946): 160-201, Diderichsen

ス語 (*Die Bybel* 2007¹⁶: 新約 9), 西フリジア語 (*Bibel* 1989²: 1377), 北フリジア語モーリング方言 (*Dât Evangelium fon Mattäus aw mauringer-frasch* 1955: 11 正書法変更), 同セルリング方言 (Clemens 2008 (1870 完成): 23)。

1982⁵ (1964): 67-71)。類例は新谷/Pedersen/大辺 (2014: 146f., 162f.)。

デ 前域 左 枠 [中域] 右 枠 [後域]
 (話題/強調・対比) [主語+弱代名詞+文副詞/否定詞] [目的語/補語+副詞句]

- (60) Hun siger [_____] _____
 Ø at [Jens bestemt aldrig] har roget [tobak i sit liv].
 Jens har [_____] bestemt aldrig] _____ roget [tobak i sit liv].
 彼女 (hun) は言っている (siger)
 イェンスは断じて (bestemt) 一度も (aldrig) 人生で (i sit liv) タバコを (tobak) 吸ったことが⁵ (har roget 現在完了形) ない (ikke (英 not)) と (at 補文標識)
 イェンスは断じて一度も人生でタバコを吸ったことがない
- (61) Hun gav [_____] ikke] _____ [børnene slik i går].
 Hun gav [_____] dem det ikke] _____ [_____] i går].
 彼女は昨日 (i går), 子供たちに (børnene) お菓子を (slik) あげなかった (gav ikke)
 彼女は昨日, 彼らに (dem) それを (det) あげなかった

左右の枠が「主語+弱代名詞+文副詞/否定詞」からなる中域をはさんでいるのが確認できる⁷。(61)の弱代名詞 dem det「彼らにそれを」の位置は「ヴァカーナゲル位置」と似ているが、くわしくは次節で説明する。

このように、「定性形非対称」による「定動詞第2位」の語順は、枠構造を前提とするのである。西ゲルマン語の「OV 型枠構造」に対して、北ゲルマン語には「VO 型枠構造」があると言える。西ゲルマン語との相異は、OV 型から VO 型への変遷に伴って (清水 2013a: 57-61), 動詞群がドイツ語などの

⁷ アイスランド語はこれとは異なる: Hún segir að Jens hafi örugglega aldrei reykt tóbak á ævinni. 「イェンスは断じて (örugglega) 一度も (aldrei) 人生で (á ævinni) タバコを (tóbak) 吸ったことが⁵ (hafi~reykt) ない (ekki) と (að) 彼女は (hún) 言っている (segir)」。

「本動詞<助動詞」($V_2 < V_1$) から英語式の「助動詞>本動詞」($V_1 > V_2$) に変わった点と、後域が語用論的位置から統語論的位置として確立した点にある。

前者について補足しておこう。動詞 (V) が目的語 (O) を支配するのは、助動詞 (V_1) が本動詞 (V_2) を支配するのと同じ関係である。動詞句の動詞と動詞群の助動詞は主要部 (head), 動詞句の目的語と動詞群の本動詞はその補部 (complement) にあたる。言語類型論では、VO 型と「助動詞>本動詞」($V_1 > V_2$) は主要部前置 (主要部先頭 head-initial, 主要部>補部), OV 型と「本動詞<助動詞」($V_2 < V_1$) は主要部後置 (主要部末尾 head-final, 補部<主要部) に分類される。

なお、北ゲルマン語の「定動詞第 2 位」に対するわずかな例外は、主節に現れる一部の話法詞と焦点副詞である。(62)について、スウェーデン・アカデミー編集のスウェーデン語辞典 (ス *Svensk ordbok A-L* 2009: 1449) は、*kanske/kanhända/måhända* 「もしかして」について、(det) {*kan ske/kan hända/må hända*} att-従属節「～ということが起こる (-ske/-hända) かもしれない (kan-/må-)」という文の意味の残存を指摘している (英 maybe 参照)。

- (62) ス *Kanske/Kanhända/Måhända* |du har/har du| rätt. もしかして君は (du) 正しい (har 現在形~rätt) かもしれない
(ib. 1449 変更)

- (63) ブ Vi *bare* satt der og ventet. 私たちは (vi) ただ (bare) そこで (der) 待っていた (satt og (英 and) ventet 過去形) だけだ
(Faarlund 2019: 210)

3-2. 大陸北ゲルマン語の目的語交替

ここで、次に再録する(61)の例を改めてよく見てみよう。後域の目的語名詞句 *børnene slik* 「子供たちにお菓子を」を受けた無強勢の弱代名詞 *dem det* 「彼らにそれを」が、中域の否定詞 *ikke* (英 not) の前に置かれている。これを目的語交替 (object shift) と言う。この目的語交替は、普通の名詞句や強勢を持つ代名詞では起こらない。大陸北ゲルマン語に広く共通する現象だ

が、微妙な差異がある。

- (61) 前域 左枠 [中域] 右枠 [後域]
 (話題/強調・対比) [主語+弱代名詞+否定詞] [目的語/補語+副詞句]
 デ Hun **gav** [_____ ikke] _____ [**børnene slik** i går].
 Hun **gav** [_____ **dem det** ikke] _____ [_____ i går].
 彼女は昨日、子供たちに (børnene) お菓子を (slik) あげなかった
 彼女は昨日、彼らに (dem) それを (det) あげなかった

「ヴァカーナール位置」との相異は、「目的語交替は動詞句内で弱代名詞が文副詞/否定詞に隣接する場合に限られ、その間に何らかの要素があってはならない」という条件である。これは「ホルムベリの一般化」Holmberg's generalization) として知られている。したがって、たとえば(64)「文副詞/否定詞+従属節の定動詞+弱代名詞」, (65)「完了の助動詞+文副詞/否定詞+過去分詞+弱代名詞」, (66)「定動詞+文副詞/否定詞+間接目的語+弱代名詞」では、目的語交替は起こらない(下線部が「何らかの要素」にあたる)。この場合には、弱代名詞(次例では下線部で指示)は文副詞/否定詞の前には出られず、名詞句と同じ位置にとどまる (Faarlund 2019: 199f.)。

- (64) デ Han købte {**ikke avisen**/**den ikke**}. 彼は (han) {新聞を (avisen)/それを (den)} 買わなかった (købte 過去形 ikke (英 not))
 hvis han {**ikke købte avisen**/**ikke købte den**/* **den ikke købte**}. もし (hvis) 彼が {新聞を/それを} 買わなかったら
 (65) ニ Vi har {**ikkje sett jenta**/**ikkje sett henne**/* **henne ikkje sett**}. 私たちは (vi) {女の子 (jenta)/彼女 (henne) を} 見かけなかった (har ikkje sett 現在完了形 (英 have not seen))
 (66) ス Han gav {**inte Jens tidskriftet**/**inte Jens det**/* **det inte Jens**}. 彼は イェンスに {雑誌を (tidskriftet)/それを (det)} あげなかった (gav 過去形 inte (英 not))

言語間の相異も認められる。デンマーク語とニューノシュクでは、(61)「[間接目的語+直接目的語] (dem det 彼らにそれを) +否定詞」のように、弱代名詞はともに交替するのが普通である(67)。一方、スウェーデン語では、最初の間接目的語しか動かないことがある(68)。文副詞/否定詞が2つの場合でも、デンマーク語とニューノシュクではかならずまたぐが(69)、スウェーデン語では任意である(70)。スウェーデン語の弱代名詞は、比較的「重い」のかもしれない。それとは逆に、再帰代名詞 sig が主語を飛び越えるスウェーデン語の長距離目的語交替 (long object shift) (71)は、「-s/-st 動詞」の成立を彷彿とさせるようである。

- (67) ニュ Egl l nte henne dei ikkje. 私は (eg) 彼女に (henne) それらを (dei) 貸さなかった (l nte 過去形~ikkje (英 not))

(Faarlund 2019: 201)

- (68) ス Han gav {henne den inte/henne inte den}. 彼は彼女に (henne) それを (den) あげなかった (gav 過去形 inte (英 not))

(ib. 201 変更)

- (69) デ I g r l ste Peter den uden tvivl ikke. 昨日 (i g r) ペーターはそれを (den) 疑いなく (uden tvivl) 読まなかった (l ste 過去形~ikke (英 not))

(Vikner 2017²: 2801)

- (70) ス Man ser {henne ju inte/ju henne inte/ju inte henne}. みんな (= 人は man 不定代名詞) 彼女を (henne) 見かけない (ser 現在形~inte (英 not)) よ (ju 心 詞) (Faarlund 2019: 201f.)

- (71) ス Klarar sig barnen p  egen hand? 子供たちは (barnen) 自力で (p  egen hand) やっていいのか (klarar sig 再帰動詞現在形)

(ib. 202)

4. 補文標識と一致

4-1. 補文標識をめぐる――従属接続詞, 関係詞, 間接疑問文の疑問詞

1-2(6) ド *wenn* du bei mir bist 「あなたがそばにいてくださるなら」では、従属接続詞 *wenn* 「～ならば」を左枠に配置した。しかし、この処置は再考を要する。語彙範疇としての従属接続詞と機能範疇としての補文標識は、同一視できないからである。従属節を導く補文標識のしくみを掘り下げてみよう。

ドイツ語の文の領域モデルを論じた Wöllstein (2010: 30) は、(72)の①関係詞と②間接疑問文の疑問詞を前域に置いて、補文標識を空白 (Ø) とする一方で、③従属接続詞 *weil* 「～なので」/ *ob* 「～かどうか」/ *dass* 「～ということ」は左枠に置いて、前域を空白にしている。前者①②は後者③と違って句であり、機能語（主要部）ではないというのが、両者を区別する理由である。簡略化すると、次のようになる。

(72)	前域	左枠	[	中域	]	右枠
ド ①	<i>wer/der</i>	Ø	[	<i>sich die Hände am Feuer</i>	]	<i>wärmen kann</i>
	手を火で暖めることができる (人はだれでも/人)					
②	<i>wer</i>	Ø	[	<i>sich die Hände am Feuer</i>	]	<i>wärmen kann</i>
	だれが手を火で暖めることができるか (ということ)					
③	Ø	<i>weil/ob/dass</i>	[	<i>du dir die Hände am Feuer</i>	]	<i>wärmen kannst</i>
	君が手を火で暖めることができる {ので/かどうか/ということ}					

はたしてそうだろうか。ゲルマン語比較統語論 (comparative Germanic syntax) の視点から検討してみよう。一例として、北海ゲルマン語の後裔である英語と西フリジア語の音韻上の共通点をついた次の合い言葉 (shibboleth) を見てみよう。

- (73) 西フ Bûter, brea en griene tsiis, [**wa't** dat net sizze kin], is gjin oprjochte Fries. バター (bûter ['butər], 英 butter), ライ麦パン (brea [brɪə], 英 bread), 青カビチーズ (griene ['grɪənə] tsiis [tsi:s], 英 green cheese), それを (dat) 言う (sizze) ことができ (kin) ない (net) 者は (wa't←wa dat, 英 who that) 本当の (oprjochte) フリジア人ではない (is gjin~Fries, 英 is no~Frisian)
- (74) ド Butter, Brot und grüner Käse, [**wer** Ø das nicht sagen kann], ist kein aufrechter Friese. 同上
- (75) オ Boter, brood en groene kaas, [**wie** Ø dat niet kan zeggen], is geen oprechte Fries. 同上

(73)西フ **wa't** dat net sizze kin 「それが言えない者」の wa't [vat] 「～する人はだれでも」は、先行詞を欠く(76)①自由関係詞(不定関係詞)である。wa [va:] (ド wer) に補文標識 dat [dɔt] (ド dass) の前接語 't [t] がついて、定動詞末尾の従属節を導いているのがわかる。しかし、(74)のドイツ語訳には、この接語化した補文標識がない。(75)のオランダ語訳も同じである。さらに、(76)の②定関係詞(西フ dyjingen dy't [dit]←dy [di] + dat/ド diejenigen die Ø～という人々), ②間接疑問文の疑問詞(西フ wa't [vat]←wa [va:] dat/ド wer Ø だれが～なのか), ③従属接続詞(西フ om't [omt]←om [om] + dat/ド weil Ø～なので; 西フ oft [ɔt]←of [ɔf] + dat/ド ob Ø～かどうか)の対応でも同様である。なお、接語化して寄り添うべきホストを欠く④従属接続詞の西フ dat 「～ということ」は、前接語 't にはならない。

(76)	前域	左枠	[中域]	右枠
①西フ	wa	't (←dat)	[dat net]	sizze kin
ド	wer	Ø	[das nicht]	sagen kann
それを言えない者は/だれがそれを言えないか (wa't←wa dat)				

- ②西フ dyjngen **dy** 't (←dat) [dat net] sizze kinne
 ド diejenigen **die** Ø [das nicht] sagen können
 それを言えない者たち (dy't←dy+'t)
- ③西フ **om/of** 't (←dat) [se dat net] sizze kinne
 ド **weil/ob** Ø [sie das nicht] sagen können
 彼らはそれが言えないので (om't←om dat)/かどう (of't←of dat)
- ④西フ Ø **dat** [se dat net] sizze kinne
 ド Ø **dass** [sie das nicht] sagen können
 彼らがそれを言えないということ (dat/*-'t)

関係節や間接疑問文という従属節を導くのは、西フリジア語に残る接語化した補文標識 -t (←dat) 「～ということ」である。西フ dy/wa (ド die/wer) は単なる代名詞にすぎず、本来、それ自体が従属節を導入することはできないはずである (西フ **Dy** kinne dat net sizze. その人たちは (dy) それを言えない / **Wa** kin dat sizze? だれが (wa) それを言えるのか)。ドイツ語も同様である (ド **Die** können das nicht sagen. / **Wer** kan das sagen? 同上)。ただし、ドイツ語では、補文標識 dass 「～ということ」は接語化せずに脱落し、音形として実現されない。したがって、空白 (Ø) になっているのである。英 I know {**that**/Ø} they can't say that. の that の省略も同様に捉えられる。

西フリジア語でも、補文標識 -t (←dat) は名詞句や形容詞などの一般語句の直後では脱落する。この場合、補文標識 -t を oft/(at) [ɔt] (←of [ɔf] dat) で補うことがある (77)。機能語である疑問詞も「疑問詞 + -t」の代わりに、「疑問詞 + oft」とすることがある (78)。of は「または」の意味だが、(79) のような再述所有代名詞構文 (ソノ～デアルトコロノ) による関係詞にも使うので、この場合は補文標識の「支え」にすぎない (79)。

- (77) 西フ Witte jo {**hoe let** Ø/**hoe let oft**} it is? あなたは (jo) 何時 (hoe let
 (ド wie spät) Ø/hoe let oft) なのか (it is) 知っていますか (witte)
 (De Haan 2006: 24 変更)

- (78) 西フ Ik frege {**wa Ø/wa't/wa oft*} it dien hie. 私は (ik) だれが (wa Ø/wa't/wa oft) それを (it) したか (dien ha) たずねた (frege)
(Bosma-Banning 1981²: 85)
- (79) 西フ de jonge {dy syn fyts Ø/**dy syn fyts't/dy syn fyts oft*} stellen wie
(カレノ dy syn 再述所有代名詞構文) 自転車を (fyts) 盗まれている (stellen wie) 少年 (de jonge)
(Hoekstra/Tiersma 1994: 525 変更)

通常はこの of dat を欠くオランダ語でも、話し言葉や方言には類例が見られる (80) (*SAND I* 2005: 16 (*Commentary* 15f.), Donaldson 2008²: 297, 303, 313)。

- (80) オ Ik weet niet {*wie/wie dat/wie of dat*} er zal komen. 私は (ik) だれが (wie/wie dat/wie of dat) 来るか (er zal komen) 知らない (weet niet)
(Donaldson 2008²: 303 変更)

中英語でも、補文標識を伴う「who that-関係節」が頻繁に登場した。

- (81) 中英 I wrecche, *which that* wepe and wayle thus このように泣きわめく哀れな私
(Chaucer: *Canterbury Tales* A931, 中尾/児馬 (編著) 1997³: 63)

今でも、英語の that は関係詞 who/which とは異なる補文標識 (英 the fact *that* they can't say that) であり、複数形 those を欠き (英 the students {*who/that/*those*} can't say that), 「*前置詞 + that-関係文」は非文である (英 the students *with whom/*that* we all are acquainted)。つまり、(76)①②西フ wa't/dy't は「wa/dy (前域) + 't (左枠)」、(72)(76)①②ド wer/die は「wer/die (前域) + Ø (左枠)」の位置を占める。これは Wöllstein (2010: 30) の分析と同じである。なお、西フ dy't/ド die などの指示詞 d-系列の関係詞

を d-関係詞 (d-relative), 西フ *wa't*/ド *wer*/英 *who, which* などの疑問詞 w-系列の関係詞を w-関係詞 (w-relative) と呼んでいる。

問題なのは, (72)③/(76)③従属接続詞の解釈である。④西フ *dat* 「～ということ」(ド *dass*) は従属節を導入するだけだが, ③西フ *om't* 「～なので」/ *oft* 「～かどうか」(ド *weil/ob*) には疑問・理由という語彙的意味があり, その意味を担うのは, 西フ 前置詞 *om* 「～のために」(ド *um*), *of* 「または」(西フ A of B, 英 A or B) である。ここでも従属節を導くのは, *dat* が接語化した補文標識 *-t* である。語彙的意味を持つド *weil* 「～なので」/ *ob* 「～かどうか」は, 主要部とは言えない。ド *ob* は西フ *of* (英 *if*) と同源である。ド *weil* 「～なので」は名詞 *Weile* 「(一定の) 時間」に連なる中高ド *die wile sō* 「～する間」が論理的意味に転じた結果である。本来, 従属節を導いたのは, 脱落した中高ド *sō* だった (Pfeifer 2004⁷: 1550)。これは so-関係節の補文標識 *so* にあたる。1-1 で挙げたド *Es irrt der Mensch, **solang** er strebt*. 「人間は努力する限り迷うものだ」の従属接続詞 *solang* 「～する間, ～する限り」も, 副詞 *solang* 「その間, その限り」と同形である。英語では, *so long as* he strives のように従属接続詞 *as* を伴い, 西フリジア語でも *De minske dwaalt, **salang't** (←*dat*)/**salang as**) er stribbet*. となる⁸。低地ドイツ語北低地ザクセン方言でも, *solang (as/dat)*-従属節「同上」(Thies 2011²: 245) と言う。

このように, Wöllstein (2010: 30) の分析は不適切である。ド *dass* (西フ *dat*) を除いて, 従属接続詞は前域 (生成文法の分析では CP の指定部) にあり, 左枠には音声的に実現されない補文標識 (CP の主要部) を設定するのが妥当なのである。そこで, 1-1(3) のド *wenn* (= 左枠) *du bei mir bist* の *wenn* も前域に置き直し, 左枠は空白 (Ø) に変更するのが適切と判断される。

(82)	ド 前域	左枠	[中域]	右枠
	<i>wenn</i>	Ø	[<i>du bei mir</i>]	<i>bist</i>

⁸ 西フ *as* (英 *as*/ド・オ *als*) の用法は複雑である。詳細は Popkema (1979), De Rooy (1965) 参照。

あなたが（私の）そばにいてくださるなら

4-2. ゲルマン諸語の補文標識

ゲルマン諸語の従属節を導く補文標識の種類は多彩である。まず、西フ dat/ド dass/英 that 「～ということ」は、「th/p/d/t-系列」の指示詞標識を伴う代名詞から発達した補文標識（代名詞補文標識 pronominal complementizer）である。一方、ドイツ語の so-関係節やスイスドイツ語チューリヒ方言の wo-関係節は、不変化詞（いわゆる副詞）を転用した補文標識（不変化詞補文標識 particle complementizer, または、副詞的補文標識 adverbial complementizer）であり、前域（指定部）にあたる要素を欠いている。次例の低地ドイツ語北低地ザクセン方言の nu {*dat/wo*} 「今はもう～だから」は、両者の使用例である（英 now (*that*)/西フ no't (←no + *dat*)/オ nu (←nu + Ø)）。

- (83) ザ *Nu* {*dat/wo*} ik di wedderseh, warrt mi dat Hart licht. 私は (ik) 君と (di) 再会した (wedderseh 現在形) 今 (nu {*dat/wo*}), ほっとした (気持ちが (mi dat Hart) 軽くなる (warrt 現在形))

(Thies 2011²: 245)

ドイツ語にもその片鱗は認められる。ブラームス作曲『ドイツ・レクイエム』(ド *Ein deutsches Requiem* 1868) の感動的な第1曲の冒頭で確認してみよう。

- (84) ド Selig sind, *die da* Leid tragen, / denn sie sollen getröstet werden. / *Die* mit Tränen säen, / werden mit Freuden ernten. 悲しみを抱く者は幸いである / その身は慰めを受けるがゆえに / 涙して種まく者は / 喜びとともに刈り入れん (Matthew 5, 4; Psalm 126, 5)

新約聖書『マタイによる福音書』第5章第4節の『山上の垂訓』から取ら

れたド Selig sind, **die da** Leid tragen 「悲しみを抱く者は幸いである」は、d-関係詞の die 「～する人はだれでも」による自由関係節（不定関係節）である。直後の da に注目されたい。これは場所の副詞 da 「そこで」（英 there）ではなく、d-系列の指示詞標識を伴う補文標識であり、w-系列の(83)wo と同類である。

一方、旧約聖書『詩篇』第 126 篇第 5 節を引用したド **Die** mit Tränen säen 「涙して種まく者」には、da は不在である。出典となった 16 世紀前半の『ルター聖書』では、da の使用があいまいだった。中高ドイツ語の対応語 dā（＜古高ド dār）による次例（Dal/Eroms 2014⁴: 243f.）では、補文標識を伴う関係詞 die dā 「～した者たち」と指示代名詞 die 「その者たち」の対比が明確である。

- (85) 中高ド **die dā** torsten vechten, **die** lägen alle erslagen. 勇んで戦った
 (torsten vechten) 者たち (die dā) だが、その者たちは (die)
 すべて (alle) 撃ち殺されて (erslagen) 倒れていた (lägen)
 (*Das Nibelungenlied* 98, 1)

他の現代ゲルマン諸語の例を見てみよう。低地ドイツ語オストファーレン方言（ド Ostfälisch）の dei da/dei はド die da/die と同様である。西フリジア語では、規則的に dy't（←dy（ド die）+ 't（←dat））となる。

- (86) 𐌺𐌰 Selig sind, **dei da** Lāid draget, / denn se sōllt ertrōistet weern. /
Dei mit Tranen saaiet, / weret mit Froiden arnen. 悲しみを抱く
 (Lāid draget) 者は (dei da) 幸いである (seelig sind) / その身は
 (se) 慰めを受ける (sōllt ertrōistet weern) がゆえに (denn) / 涙
 して (mit Tranen) 種まく (saaiet) 者は (dei) / 喜びとともに (mit
 Froiden) 刈り入れん (weret～arnen)

(*De Plattduitsche Baibel* 1997: 652, 361)

- (87) 西フ Lökkich **dy't** treurje, / want se sille treaste wurde. / **Dy't** mei

triennen siedzje, / sille mei jubel sightsje. 悲しみを抱く (treurje)
 者は (dy't) 幸いである (lokkich [binne]) / その身は (se) 慰め
 を受ける (sille treaste wurde) がゆえに (want) / 涙して (mei
 triennen) 種まく (siedzje) 者は (dy't) / 喜びとともに (mei jubel)
 刈り入れん (sille~sichtsje) (Bibel 1989²: 1377, 733)

「w-系列」の例には、上記のチューリヒ方言とペンシルヴァニアドイツ語
 の「先行詞+フ wo/ペ vo」がある。アフリカーンス語は単数・複数、人間・
 物事で「先行詞+wat」に統一している。この wat は「*前置詞+wat」では
 なく、「waar (R-代名詞)/wat~前置詞」となるように (Donaldson 1993:
 146-148), 英 that に相当し、英 what/オ wat のような関係代名詞ではなく、
 補文標識と考えられる。アフリカーンス語の自由関係詞 (不定関係詞) は、
 wie (英 who/オ wie)/wat 「~する人/物事」(英 what/オ wat) である。

- (88) フ Seelig sind **die, wo** truured — / die wèèrded trööschtet. 悲しみを
 抱く (truured) 者は (die, wo) 幸いである (seelig sind) / その身
 は (die) 慰めを受ける (wèèrded trööschtet) がゆえに

(s Nöi Teschtamänt Züritüütsch 1997: 5)

- (89) ペ Ksaykend sinn **dee vo** dreebsawl henn. / Si zayla gedraysht vadda.
 悲しみを抱く (dreebsawl henn) 者は (dee vo) 幸いである
 (ksaykend sinn) / その身は (si) 慰めを受ける (zayla gedraysht
 vadda) がゆえに

(Es Nei Teschtament 1993: 5)

- (90) ア Geseënd is **dié wat** treur, / want hulle sal vertroos word. / **Wie**
 met trane saai, / sal die oes met gejuig inbring. 悲しみを抱く
 (treur) 者は (dié wat) 幸いである (geseënd is) / その身は (hulle)
 慰めを受ける (sal vertroos word) がゆえに (want) / 涙して (met
 trane) 種まく (saai) 者は (wie) / 喜びとともに (met gejuig) 刈
 り入れん (sal die oes~inbring)

(Die Bybel 2007¹⁶: 新約 9, 旧約 653)

北ゲルマン語に移ることにしよう。デンマーク語の関係文は次の2手に分かれる。

- (91) デ Salige er **de, som** sørger, / for de skal trøstes. 悲しみを抱く
(sørger) 者は (de, som) 幸いである (salige er) / その身は (de)
慰めを受ける (trøstes) がゆえに (for) (Bibelen 1998: 1044)
- (92) デ **De, der** sår under tårer, / skal høste med jubel. 涙して (under
tårer) 種まく (sår) 者は (de, der) / 喜びとともに (med jubel)
刈り入れん (skal høste) (ib. 554)

デンマーク語の(92)de, der (ド die da) の der は, ド da (<古高ド dār) と同源の補文標識だが, 主語の関係節化にしか使えない。一方, (19)デ de, som の som は, 単独で広く関係詞として用いる補文標識で, 現代北ゲルマン語では最も一般的である。英 that と似て, 関係代名詞ではなく, 無変化で前置詞に支配されず, 「*前置詞+デ som-関係節」(*前置詞+英 that-関係節)は不可である(前置詞残留 preposition stranding)を伴う「デ som-関係節~前置詞」は「英 that-関係節~前置詞」と同様に可)。som には「~のよう」の意味もあり, 用法としては英 as/ド wie に相当する。

スウェーデン語の(93)som もデンマーク語の som と同じく, 広く関係詞として用いる。間接疑問文では, 主語の場合に限って, 両言語とも複合的に「ス 疑問詞主語 vem (英 who)+補文標識 som-従属節」/「デ 疑問詞主語 hvem (英 who)+補文 der-従属節」(だれが~なのか)とする (94)(95)。アイスランド語の対応語 sem も主語と目的語の関係詞化(96)以外では, 「関係詞+補文標識 sem」となる(97)。しかし, 間接疑問文では, 「疑問詞+Ø」となって sem は登場せず, 定動詞が補文標識の位置 (Ø) を占める(98)。

- (93) ス Jag känner ingen **som** inte kan säga det. 私は (jag) それを (det) 言え (kan säga) ない (inte) 者を (som) 知りません (vet inte)
- (94) ス **Vem** kan inte säga det? — Vet du **vem som** inte kan säga det? だ

れが (vem) それを言えないのですか—誰が (vem som) それを言えないか君は (du) 知っていますか (vet)

- (95) デ *Hvem* kan ikke sige det? — Vet du *hvem der* ikke kan sige det?
同上

- (96) ア Hann gerði það, *sem* hann gat. 彼は (hann) 彼ができた (hann gat) ことを (það (英 that/ド das), sem) した (gerði)

(Friðjónsson 1978: 95 変更)

- (97) ア húsið, *þar sem* hann bjó 彼が (þar (英 there/ド da) sem) 住んだ (bjó) 家 (húsið)

Þar bjó hann. そこに (þar) 彼は住んだ (ib. 95 変更)

- (98) ア *Hver* getur ekki sagt það? — Veistu *hver getur* ekki sagt það?
だれが (hver) それを (það) 言え (getur~sagt) ない (ekki) の
ですか—誰が (hver) それを (það) 言え (getur~sagt) ないか (ekki)
君は (-u←þú) 知っていますか (veist-)

フェーロー語には, sum (ス・デ・ブ・ニ som/ア sem) と並ぶ補文標識として, 次例の ið [ɪ] がある。関係詞以外に, 従属接続詞としても用いる (7_E tá ið ~したときに (3-1(49)参照) ↔ tá そのときに)。また, 次例の7_E tí at-従属文「~なので」(↔ tí それゆえ, tað 「それ」の与格) の at (ス att/デ・ブ・ニ at) は, ア því að-従属文 (↔ því, það 「それ」の与格) の að と同じく, 西7 t (←dat)/英 that/ド dass にあたる。

- (99) 7_E Sæl eru *tey*, *ið* syrgja, *tí at* tey skulu fáa troyst. *Tey*, *ið* sáa við gráti, skulu heysta við gleði. 悲しみを抱く (syrgja) 者は (tey, ið) 幸いである (sæl eru) / その身は (tey) 慰めを受ける (skulu fáa troyst) がゆえに (tí at) / 涙して (við gráti) 種まく (sáa) 者は (tey, ið) / 喜びとともに (við gleði) 刈り入れん (skulu heysta)

(*Biblia* 1983: 新約 5, 旧約 636)

上記の som/sem/sum, der, at/að とは別に、古ノルド語で最も一般的な補文標識は、アイスランド語では古風になった er (<代名詞 es) だった。これは、ドイツ語の er やゴート語の is と同源の代名詞補文標識である。関係詞 (100) (101), 従属接続詞 (102) (102), およびその支えとしてはたらく、多方面で用いられた。

- (100) 古ノ Frá hverjum er [*saga sú, er* hann segir] ? 彼が (hann) 言っている (segir) [トコロノ (er 関係詞)] その話は (saga sú) だれについて (frá hverjum) なのか (er) (*Fóstbræðra saga*, Chap. 23)

- (101) 古ノ “[*Því*] veld ek eigi,” segir Qnundr, “[*er* þeir eru ósáttir], それには (því) 私が^g (ek) 原因なのでは (veld) ない (eigi)”とオヌンドル (男名) は言った (segir 歴史的現在)。「彼らが^g (þeir) 不和になっている (eru ósáttir) ことには (er 関係詞)」

(*Egils saga Skalla-Grimssonar*, Chap. 81)

- (102) 古ノ ok [*er* hann náði konungs fundi], kvaddi hann konunginn. そして (ok) 彼は (hann) 王の集会に (konungs fundi) 近づいた (náði) ときに (er), 王に (konunginn) 挨拶した (kvaddi hann)

(*Gunnlaugs saga ormstungu*, Chap. 9)

- (103) 古ノ Þeir bræðr hans stýrðu ríkinu, [*þá er* hann var í brottu]. 彼が (hann) 不在だった (var í brottu) ときに (þá er), 彼の兄弟たちが^g (þeir bræðr hans) 国を (ríkinu) 治めていた (stýrðu)

(*Ynglinga saga*, Chap. 3)

不変化詞 (いわゆる副詞) 由来の補文標識 (不変化詞補文標識) の中でとくに広い用法を備える現代ゲルマン語の例には、アルザスドイツ語の as がある。この語は英語の as やドイツ語の als と同源である。アレマン方言に共通してアルザスドイツ語の関係詞は wu (ド wo) だが、同言語の as はド als と同じく比較の対象を表すほかに (104), 主語節・目的語節を導く英 that/ド dass のようにも用いる (105) (106)。さらに、間接疑問文では、西フ

リジア語の「疑問詞 -t (←dat)」のように、「疑問詞 + as」(7ℓ èb (英 if/ド ob) を除く) として現れる(107)(108)。(108) *wènn-me abfahrt/a-kummt* では、「出発/到着するときに」の意味になる(7ℓ *wènn as* いつ〜か (ド *wann*) ↔ 7ℓ *wènn* 〜するときに (ド *wenn*))。

- (104) 7ℓ *Es ésch vil schéner as gèstert*. 昨日 (*gèstert*) よりも (*as*) ずっと (*vil*) 天気が良い (*es ésch~schéner*) (Brunner 2001: 175)
- (105) 7ℓ *Es ésch nume schad, [as die Wohnung e-so tir ésch]*. その住居が (*die Wohnung*) そんなに (*e-so*) 高価 (*tir*) である (*ésch*) ことは (*as*) ただ (*nume*) 残念だ (*ésch schad*) と言うほかはない (ib. 279)
- (106) 7ℓ *Se fènde alle zwài, [as der Zug vil praktischer ésch]*. 彼らは (*se*) 2 人とも (*alle zwài*) 電車のほうが (*der Zug*) はるかに (*vil*) 便利 (*praktischer*) だ (*ésch*) と (*as*) 思っている (*fènde*) (ib. 197)
- (107) 7ℓ *Lüeg do, [wèr as zu uns kummt]*. だれが (*wèr as*) 私たちのところへ (*zu uns*) 来るか (*kummt*) 見てみなさいよ (*lüeg do*) (ib. 181)
- (108) 7ℓ *Méndestens wàiss me, [wènn-as me abfahrt] un oi [wènn as-me a-kummt]*. 少なくとも (*méndestens*) いつ (*wènn-as*) (人は *me*, 不定代名詞) 出発するか (*abfahrt*), そして (*oi*), いつ (*wènn as*) (人は *-me*, 不定代名詞) 到着するか (*a-kummt*) (人は *me*) わかる (*wàiss*) (ib. 195)

以上、紹介したのは、定動詞を含む従属節を導く定形補文標識 (finite complementizer) である。このほかに、不定詞句 (= 不定詞節) を導く不定形補文標識 (non-finite complementizer) も挙げられる。オランダ語、西フリジア語、アフリカーンス語の「om + te-不定詞句」(〜すること) がそれぞれである。ドイツ語の「um + zu-不定詞句」(〜するために) に対応する「om (義務

的) + te-不定詞句」(～するために)もあるが、このド um/オ om は目的の意味を持つ前置詞である。補文標識 om はこれから発達したもので、語彙の意味が薄れ、不定詞句を導く役割を担うように文法化した。その過程は、om の使用程度に応じて、「アフリカーンス語 (ほぼ義務的) > 西フリジア語 (推奨) > オランダ語 (任意) > ドイツ語 (未発達)」の順で進んでいると言える。

- (109) ド Sie haben vor [$\emptyset$ nach Japan **zu kommen**]. 彼らは日本に来るつもりだ
- (110) オ Zij zijn van plan [$\{om/\emptyset\}$ naar Japan **te komen**].
- (111) 西フ Hja binne fan doel [$\{om/^{(2)}\emptyset\}$ nei Japan ta **te kommen**].
- (112) フ Hulle is van plan [$\{om/^*\emptyset\}$ na Japan **te kom**].

英語の for もこれによく似ており、I want $\{\emptyset$ you to come/very much **for you to come**}. のように、動詞と隣接しない場合に現れる。for him のように目的語を伴うのは、前置詞のなごりと言える。

4-3. 西フリジア語の「補文標識の一致」と関連現象

補文標識の一致について論じるにあたって、まず、関口存男^{つぎお}「^{ベルリンなまり}伯林訛 雑考 (2)」(1934) の次の一節を見てみよう。

- (113) wennste = wenn du それから、一つ疑問なのは、wenn du の代わりに wennste と云う件です。Wenn de でよささうなものを、何故 s が這入るのか、〈中略〉haste, meenste, kommste, jehste などと云ふ口調にあやかつて wennste なんてものが出来たのではないかと思ひます。〈中略〉/たとへば、『おれがほんとに好きなら』斯々してくれてもよささうなものだ、と云つたやうな時は Wennste mir uffrichtig lieben dust (= wenn du mich aufrichtig lieben tust) と云ふ。また、たとへば、『何の苦もなく』やつつける (入學試験の答案など) ことを、als wennste schwebst (まるでスーツと宙に浮かんで行くやうに)

と云ふなどもそれです。

(関口 1994: 355f.)

これは、管見の限り、補文標識の一致について、日本人が発した関連発言の先駆けと言えるように思われる。ペリ *haste/meenste/kommste/jehste* は、ド *hast/meinst/kommst/gehst* 「君は持っている/思う/来る/行く」にあたる。オランダのヴァン・ハーリングゲン (Coenraad B. van Haeringen 1892～1983) の『活用する接続詞』(1962² 再録) と Van Ginneken の『従属接続詞と代名詞の活用』と題する論考が世に出たのは、それから5年後の1939年のことだった(原題は参考文献参照)。

本節の趣旨は、「従属接続詞(厳密には補文標識)は屈折(活用)し、定動詞に準じた一致 (agreement) による語尾を持つ」というものである。ちなみに、「曲用」(declension) は名詞類, 「活用」(conjugation) は動詞の「屈折」(inflection, 語形変化) である。以下では、西フリジア語の従属接続詞(補文標識) *dat* 「～ということ」を用いた例で確認していこう。

- (114) 西フ **Ik leau net **dat do** [dɔ'do:(u)] dat sizze **kinst***. 私は (ik) 君が (do) それを (dat) 言える (kinst～sizze) とは思わない (leau net)
- (115) 西フ *Ik leau net {**datsto** [dɔs'to:(u)]/**datst-Ø** [dɔst]}* dat sizze ***kinst***.
同上 (datsto (datst-+o (doの接語化)/-Ø (代名詞主語省略))

(114) *dat do* (ド *dass du*) は単なる2語の連続にすぎない。その発音 [dɔ'do:(u)] ← [dɔd'do:(u)] ← [dɔt 'do:(u)] は、複数の単語間で子音の有声と無声の連続が逆行同化で有声に統一され、二重子音の縮約を経た結果である。これは *dat do* に限らない一般的な現象である。この場合、*dat* が無変化の「**dat do* [dɔ'do:(u)] + 従属節」は許されない。

一方、(115) *datsto* [dɔs'to:(u)] では、*do* 「君」が義務的に接語化して、-o [o:(u)] となる。西フ *Heitelân, hoe moai **bisto**!* 「祖国よ、おまえは何と美しいことか」(Troelstra) のように、左枠の定動詞に隣接する場合と同じく、-o

(←do) は左枠の従属接続詞に隣接する場合に限られた統語的接語 (syntactic clitic) なのである。datsto [dɔs'to:(u)]←[dɔts'to:(u)] の発音は、破擦音の発生を嫌って [s]←[ts] となり、dat の t [t] が脱落した結果である。
*[dɔz'do:(u)] とならないのは、接語化で1語の音韻論的語 (phonological word) になっているためである。それにしても、datsto の -st は奇妙である。
-s-を挿入する発音上の理由は見当たらない。

じつは、datsto の -st は定動詞 *kinst* [kɪst] 「～できる」の語尾 -st と同じなのである。do 「君」は代名詞主語省略 (*pro*-drop) できるので、-o (←do) を欠く datst [dɔst] ともなる。もし単に do が接語化して -to になったのなら、代名詞主語省略で -to が脱落するはずだが、*dats とはならない。つまり、「-st は補文標識の活用語尾」なのである。これは従属節を導く補文標識 dat/-t に限られる。この語尾 -st は、従属接続詞一般(116)、関係詞(117)、間接疑問文の疑問詞(118)に接語化した補文標識 dat/-t でも、規則的に現れる。その際、「活用」しているのは、あくまで補文標識 dat/-t なのである。

- (116) 西フ Do moatst jûns altyd toskpoetse [*foar'tst* op bêt giest]. 君は (do) 夜には (jûns) いつも (altyd) 寝る (op bêt giest) 前に (foar'tst [fwast]←[fwatst], foar (英 before/ ド bevor) + -t (←dat) + -st + -Ø (←do), 従属接続詞) 歯を磨く (toskpoetse) 必要がある (moatst) (Van der Meer 2009: 102 変更)

- (117) 西フ Ik wit net [oer *wa'tsto* it hast], mar [*watsto* seist] is net wier. 君がだれについて (oer wa'tsto ['vas'to:(u)]←['vats'to:(u)], wa (英 who/ ド wen) + -t (←dat) + -st + -o (←do), 疑問詞) 話しているか (it hast) 私は (ik) 知らない (wit net), しかし (mar) 君が言っていることは (watsto [vɔs'to:(u)]←[vɔts'to:(u)]←[vɔtts'to:(u)]←wat (英 what/ ド was) + -t (←dat) + -st + -o (←do), 関係詞) 本当では (wier) ない (is net) (ib. 78 変更)

datsto [dɔs'to:(u)]←[dɔts'to:(u)] と同じく、破擦音の発生を嫌って [s]

←[ts] となるので、接語化した補文標識 't は発音しない ((116) foar'tst [fwast]← [fwatst], (117) wa'tsto ['va:s'to:(u)]← ['va:ts'to:(u)]))。そこで、関係詞 wat では -t を除き、(117) watsto [vɔs'to:(u)]← [vɔts'to:(u)] (←wat + -t (←dat) + -st + -o (←do)) とつづる。-t を除いた foar'st, wa'sto とつづることもある。そのために、従属接続詞・関係詞・疑問詞それ自身が活用しているように見えるのである。

この -st は 2 人称親称単数という人称と数に一致した語尾であり、時制やムード（法）とは無縁である。そこで、「補文標識の一致」(complementizer agreement) と呼ぶほうが適切である。「定動詞第 2 位」の原則に従って、右枠の定動詞は左枠に移動するわけだが、左枠に補文標識が居座っていると、動くことができない。そのため、「定動詞の文法的素性だけが移動する」とも言えそうだが、動詞自身の素性である時制やムード（法）は語尾 -st には反映されない。むしろ、「ヴァカーナージェル位置」に隣接する人称代名詞 do「君」と左枠の補文標識との接触で生まれた近世以降の現象とみなすのが妥当と言えよう。

西フリジア語では、「補文標識の一致」は 2 人称親称代名詞 do に限られる。それは、他の語尾 -e/-t/-en に比べて、語尾 -st が音韻的に「鮮明」だからかもしれない。代名詞主語省略も do のみに限定されている。その一方で、ドイツ語やオランダ語の諸方言の中には、大部分あるいはすべての人称と数で一致を示す例も存在する。『オランダ語方言統語論地図』の第 I 巻 (SAND I 2005: 19-36, *Commentary* 17-24) を紐解くと、その様子がよく理解できる。

さらに、同書の地図 (61-66) によれば、返答詞のオ ja/nee (英 yes/no) には、主語代名詞の前接語が付加される方言がかなり見られる。その際、ベルギー北西部の西フランドル州 (オ Westvlaanderen) を中心に、ja/nee と前接語の間に定動詞の語尾が加わる。標準オランダ語に焼き直した同書の雛形の例文 (118) では、jaa-**n-s**「はい」の -s [s] は 3 人称代名詞複数主語 ze [za]「彼(女)ら」の前接語であり、-n が完了の助動詞 hebben (英 have) の語尾にあたる。なお、ja/jaa- [jaː] のつづりは正書法上の区別にすぎない。

- (118) オ *Hebben ze* al gegeten? — Jaa-*n-s*. 彼(女)らは (ze) もう (al) 食事をしたのですか (hebben) —はい (jaa-n-s)
(SAND I 2005 (Commentary): 54)

オランダ語西フランドル方言 (オ Westvlaams) では, ja「はい」の3人称複数語尾 -n は補文標識と定動詞の語尾と共通している (119)。これを ja/nee の一致 (agreement of *ja* and *nee*) とみなす意見もある ((46) の出典参照)。つまり, 「はい/いいえ」も「活用 (屈折)」とも言えることになる。

- (119) 西フ jaa-*n-ze* da-*n-ze* gaa-*n-ze* (SAND I 2005: 66)
(英 yes-語尾-they, that-語尾-they, go-語尾-they)

5. 動詞群の語順

5-1. 動詞繰り上げ, 第3構文

これまで, 「右枠の定動詞が左枠に移動する」などと述べてきた。これはゲルマン諸語の動詞が位置を変えやすい証拠である。かたや日本語の動詞は, 歴史言語学的に一貫して文末を保ってきた。日本語のような膠着語 (agglutinative/agglutinating language) の動詞は, 「待たせられ続けていただろうに」のように, 「ヴォイス (態: 使役<受動) <アスペクト (継続<完了) <話法」という階層に従って, 語幹に種々の要素をつけて分割できないかたまりを作る。これを動かすのは大変なことである (松本 2006: 44)。一方, ゲルマン諸語の動詞は独立の要素の集合であり, 動詞群の形態的なまとまりが弱く, 個々の要素を分離できるのである。ゲルマン諸語の動詞群の語順は多様である。詳細は Wurmbrand (2004), SAND II (2008: 14-25) に譲り, 以下ではドイツ語と関連言語に限定することにしたい。

動詞群には, 全体としてのまとまりの強さ (結束性 cohesion) に段階がある。まず, 完了形だが, 英 I *have built* a house. は「家を建てられた状態 (built) 持っている (have)」, ド Er *ist gekommen*. 「彼は来た」は「来た者

(gekommen<Gekommener) だ (ist)」に由来する。しかし、今では、「彼は家を建てた」/「彼は来た」の意味になっており、「過去分詞+完了の助動詞」はひとまとまりに解釈される。使役動詞では、ド dass sie das **wissen ließ** 「彼女がそれを[知らせた] こと」の wissen lassen 「知らせる」は意味的に1語に相当し、ド tranken 「飲ませる」/fällen 「切り倒す」(←trinken 飲む/fallen 倒れる)のように、完全に1語の例もある(jan-動詞)。一方、知覚動詞構文は、ド dass sie ihn **kommen sah** 「彼女が彼が[来る]のを[見た] こと」のように、意味的なまとまりに欠けている。ただし、ド [**Kommen sehen**] haben wir die Fluten nicht. 「洪水が来るのを私たちは見なかった(sehen 代替不定詞)」(Pafel 2011: 192)と前域に置けるので、統語的には動詞群をなしていると言える。

ド zu-不定詞句を伴う一部の他動詞も、動詞群としてのまとまりを示すことがある。ド versuchen 「～することを試みる」を例に取ってみよう。

(120) ド dass sie [**versucht hat** (=右枠)], [den Kindern ein Märchen **vorzulesen** (=後域)] 彼女が[子供たちに童話を読み聞かせることを] 試みたこと

(121) ド dass sie den Kindern ein Märchen [**vorzulesen versucht hat** (=右枠)] 彼女が子供たちに童話を[読み聞かせようとした] こと

zu-不定詞句全体を後域に「枠越え」した(120)は、versuchen 「試みる」が他動詞として目的語「～することを」を伴う「2階建て」の埋め込み構造になっている。一方、vorzulesen 「読み聞かせる」を母型文の右枠に動詞繰り上げ(verb raising)すれば、(121)のように「平屋」のひとまとまりの動詞群になり、versuchen は助動詞「～しようとする」に近づく。

さらに、zu-不定詞句の一部が後域に「枠越え」し、目的語が中域に残る第3構文(third construction)も挙げられる。次の②～④の従属節がその例である(Wöllstein-Leisten 2001: 15)。

- (122) 左枠 [中域] 右枠 [後域]
- ド ① weil [er] *versprochen hat* [*den Kindern* ein Märchen *vorzulesen*]
- ② weil [er *den Kindern*] *versprochen hat* [_____ ein Märchen *vorzulesen*]
- ③ weil [er *ein Märchen*] *versprochen hat* [den Kindern _____ *vorzulesen*]
- ④ weil [er *den Kindern ein Märchen*] *versprochen hat* [_____ *vorzulesen*]
- なぜなら彼が子供たちに童話を読み聞かせるのを約束したので

話法の助動詞ではどうだろうか。スイスドイツ語チューリヒ方言では、不定詞句全体が完了形で話法の助動詞に後続する語順も普通である。これは動詞繰り上げ以前の段階の似ている(123)(124)。(125)はブラームス作曲の標準ドイツ語による民謡である。オランダ語西フランドル方言でも、類例が見られる (SAND II 2008: 29f.)。

- (123) チュ Si säit, das me **hett sele** [de tokter **la choo**]. (人は me 不定代名詞) 医者を (de tokter) 来させる (la choo, 直訳: ド lassen kommen) べきだったのに (hett sele, 直訳: ド hätte sollen) と (das) 彼女は (si) 言っている (säit) (Baur 1997¹¹: 155)
- (124) チュ Zwäi jaar schpöötter simer wider häi, wil myn maa **hät müese** [s gschäft vo sym vatter **übernëë**]. 夫が (myn maa) 仕事を (s gschäft) 父親から (vo sym vatter) 継ぐ (übernëë, ド übernehmen) 必要があった (hät müese) ので (wil), 2年後 (zwäi jaar schpöötter) 再び (wider) 我々は (-mer) 家に戻った (si- häi) (ib. 154)
- (125) ド O Mädchen, O Mädchen, / Du einsames Kind, / Wer hat den Gedanken / Ins Herz dir gezinnt, / Dass ich **soll** [den Garten, / die Rosen nicht **sehn**] ? ああ, お嬢さん, お嬢さん, ひとりぼっちの娘さん, だれがあなたの心にそんな思惑の火をつけたのでしょう, この私がお庭や薔薇^{ばら}を見てはいけないと
(ド *Erlaube mir, feins Mädchen*)

5-2. 左枝分かれ型と右枝分かれ型, 上方域と下方域, 中間配列

さて, (123)の標準ドイツ語訳に注目してみよう。

- (126) ド Sie sagt, dass man den Arzt ***hätte kommen lassen sollen***. (人は man 不定代名詞) 医者来させるべきだったのにと彼女は言っている

この例の $\text{kommen}_4 \text{lassen}_3 \text{sollen}_2$ 「来₄させる₃べき₂ (代替不定詞)」は、日本語と同じく、右側の要素が左側の要素を支配する左枝分かれ型 (left branching) の「 $V_4 < V_3 < V_2$ 」の語順を示している。一方、 $\text{hätte}_1 + [\text{kommen}_4 \text{lassen}_3 \text{sollen}_2]$ 「[来₄させる₃べき₂] だったのに₁」では、左側の要素が右側の要素を支配する右枝分かれ型 (right branching) の「 $V_1 > [V_4 < V_3 < V_2]$ 」が混ざっている。ドイツ語教科書では、「副文 (= 従属節) の動詞の語順は日本語と同じ」と説いているが、それは完了形では 2 要素の動詞群に限った場合にすぎない。

一般に動詞群は 4 要素までが普通だが、あえて 5 要素の例を検討してみよう。以下では、動詞の種類は不定詞と過去分詞に限定し、zu-不定詞は考慮外とする。

- (127) 上方域 ($V_X > V_{X+1}$) | 下方域 ($V_{X+1} < V_X$)

ド dass er sie hier ***hätte***₁ | ***stehen***₅ ***bleiben***₄ ***lassen***₃ ***sollen***₂. 彼が彼女をここに [立った (*stehen*₅) ままでい (*bleiben*₄) させる (*lassen*₃) べきだった (*müssen*₂ 代替不定詞) たのに (*hätte*₁)] ということ (dass)

dass er sie hier ***hätte***₁ ***sollen***₂ | ***stehen***₅ ***bleiben***₄ ***lassen***₃

dass er sie hier ***hätte***₁ ***sollen***₂ ***lassen***₃ | ***stehen***₅ ***bleiben***₄

*dass er sie hier ***hätte***₁ ***sollen***₂ ***lassen***₃ ***bleiben***₄ | ***stehen***₅ (下方域 1 要素)

デンマークのゲルマン語学者ベック (Gunnar Bech 1920~1981) は、ドイ

ツ語の右枠の動詞群を下方域 (ド Unterfeld, 「__」) と上方域 (ド Oberfeld, 「__」) に区分した (Bech 1983² (1955/57): 62-67)。下方域の動詞群は左分岐型を示し, 最下位から順に 2 つ以上の要素からなり, 過去分詞も含まれる (ド kommen₂ konnte₁ 来られた, kennen₂ lernte₁ 知り合いになった, kennen₃ gelernt₂ hat₁ 知り合いになった)。一方, 3 要素以上になると, 右分岐型の上方域が現れる。これはドイツ語では, とくに話法の助動詞の完了形で義務的であり (ド hat₁ | kommen₃ können₂ 代替不定詞 ↔ *kommen₃ gekonnt₂ hat₁ 来られた), 最上位の定動詞から順に不定詞の随伴を伴う。下方域の動詞は 1 要素では不可であり, 最低 2 要素を必要とする。

ゲルマン諸語の動詞群は, ドイツ語式のハイブリッド型に限られるわけではない。上方域だけの (標準) オランダ語, 下方域だけの西フリジア語も存在する。まず, (128) に示すように, 西フリジア語の動詞群は日本語と同じく, 一貫した「被支配要素 < 支配要素」の左分岐型 ($V_5 < V_4 < V_3 < V_2 < V_1$) を示す。逆に, オランダ語は (129) に示すように, 一貫した「支配要素 > 被支配要素」の右分岐型 ($V_1 > V_2 > V_3 > V_4 > V_5$) が標準語の規範であり, 両者は鏡像関係 (mirror image) をなしている。西フリジア語の moatten₂ hat₁ 「する必要があった」では, 第 1 不定詞 moatte の過去分詞 moatten (ド gemusst) を使い, 代替不定詞は出現しない。一方, オランダ語の heeft₁ moeten₂ 「同上」は逆の語順になり, ドイツ語と同じく代替不定詞 moeten (ド müssen) が現れる。

- (128) 西フ dat er se hjir stean₅ bliuwe₄ litte₃ moatten₂ hie₁ 彼が^s (er) 彼女を (se) ここに (hjir) 立った (stean₅) ままでい (bliuwe₄) させる (litte₃) べきだつ (moatten₂ 過去分詞) たのに (hie₁) という こと (dat)

- (129) オ dat hij ze hier had₁ moeten₂ laten₃ blijven₄ staan₅ 彼が^s (hij) 彼女を (haar) ここに (hier) 立った (staan₅) ままでい (blijven₄) させる (laten₃) べきだつ (moeten₂ 代替不定詞) たのに (had₁) という こと (dat)

形態的なまとまりが弱いゲルマン諸語の動詞群ではあるが、「右側（＝後方）の成分が左側（＝前方）の成分を支配する」という語形成での主要部後置の原則が作用して、結束性が強まることがある。これは語内部の形態素（意味を区別する最小単位）の配列に関する原則によるもので、たとえば複合語の性は最も右側（＝後方）の成分に従う（ド **der Autobahnring** 環状高速道路 ←das Auto 車+die Bahn 道路+der Ring 循環）。下方域はこの原則が関与して、複合動詞に準じたまとまりを作る場合と言える。上方域で代替不定詞が現れるのは、ド hätte₁ | kommen₃ sollen₂ 「来る₃ べきだ₂ たのに₁」のように、支配要素 hätte₁ が被支配要素 sollen₂ の右側（＝後方）にないので、形態表示できないためであると考えられる。

古高ドイツ語では、2要素の動詞群は右分岐型の「 $V_1 > V_2$ 」が優勢だった。中高ドイツ語以降に左分岐型の「 $V_2 < V_1$ 」が増えたのである（Sapp 2011）。3要素以上の例は、中世では稀だった。代替不定詞は13世紀に最初の例があり、それを伴う3要素の語順は、初期新高ドイツ語では「 $V_1 < V_2 < V_3$ 」が約6割、「 $V_1 > V_3 < V_2$ 」が約3割を占めている（Fleischer/Schallert 2011: 179-186）。過去分詞として支配関係を明確に形態表示する完了形で、上述の主要部後置という語内部の形態素配列の原則がはたらき、複合動詞に準じた最小数の2要素を中心に、左分岐型が浸透したと考えられる。右分岐型の「 $V_1 > V_2$ 」（is₁ gekommen₂ 来た）が規範的なオランダ語でも、話し言葉では、とくに過去分詞を含む2要素は、ドイツ語（gekommen₂ ist₁ 同上）と同じ左分岐型の「 $V_2 < V_1$ 」（gekommen₂ is₁ 同上）が好まれる。ドイツ語では、デフォルト形態の不定詞を含む2要素でもこれが一般化したのが、3要素以上には完全には及ばず、上方域が残ったと考えられる。

事実、(130)に示すように、上方域の形成は、不定詞との共起制限がほとんどない①話法の助動詞では頻繁に起こる。しかし、不定詞の意味的選択制限が狭まり、複合動詞に準じたまとまりが強まるにつれて、少なくなる（Eisenberg et al. 2001: 250）。すなわち、②知覚・使役/許容の助動詞では任意となり、③④⑤の動詞では上方域は現れない。受動態は過去分詞を義務的に伴うので、上方域は現れず、代替不定詞も不在である（ド gesehen₃

worden₂ ist₁ / *ist₁ | gesehen₃ werden₂ 見られた)。ちなみに、オランダ語ではすべて代替不定詞が可能である (清水 2019b: 245-246)。

- (130) ド ①話法の助動詞: hat₁ | arbeiten₃ können₂ / *arbeiten₃ gekonnt₂
hat₁ 働くことができた
- ②知覚・使役/許容の助動詞 (sehen/hören ~するのを見る/聞く, lassen ~させる/したままにする, など): hat₁ | arbeiten₃ sehen₂
/ arbeiten₃ gesehen₂ hat₁ 働くのを見た, hat₁ | arbeiten₃ lassen₂
/ arbeiten₃ gelassen₂ hat₁ 働かせた
- ③継続動詞 (bleiben ~したままにいる, など): sitzen₃ geblieben₂
ist₁ / *ist₁ | sitzen₃ bleiben₂ すわったままだった
- ④運動動詞 (gehen/kommen ~しに行く/来る): arbeiten₃
gegangen₂ ist₁ / *ist₁ | arbeiten₃ gehen₂ 仕事をしに行った
- ⑤lernen 「~するのを学ぶ」/lehren 「~するのを教える」/helfen
「~するのを手伝う」: kennen₃ gelernt₂ hat₁ / *hat₁ | kennen₃
lernen₂ 知り合いになった

これに加えて、ドイツ語の話し言葉では、下方域の語彙の意味を持つ要素が強勢を伴って、最下位要素から順に随伴されながら、上方域のさらに前に移る中間配列 (ド Zwischenstellung) が起こる (Pafel 2011: 68)。ここでは、語彙の意味を持つ要素が後続の文法的意味を持つ要素から順に分離し、前置されて際立つことになる。意味の中心を先に伝える効果があると言えるだろう。

- (131) ド ob er sie hier [hätte₁ | stehen₅ bleiben₄ lassen₃ sollen₂]
彼が彼女をここに立った (stehen₅) ままでい (bleiben₄) させる (lassen₃) べきだった (müssen₂) た (hätte₁) のかということ (ob)
ob er sie hier [stehen₅] [hätte₁ | bleiben₄ lassen₃ sollen₂]
ob er sie hier [stehen₅ bleiben₄] [hätte₁ | lassen₃ sollen₂]

ob er sie hier [stehen₅ bleiben₁ lassen₂] [hätte₁ | sollen₂]

中間配列の最古の例は、宮廷叙事詩『パルツイヴァール』（ド *Parzival* 1220 年頃）に見られる (132) (Paul 1959⁵: 149)。

- (132) 中高ド nu was ez ouch über des jâres zil daz Gahmuret [gepriset₃]
vil [was₁ worden₂]. ガハムレトが大いに (vil) 称賛
(gepriset₃) され (worden₂) た (was₁) ときから (daz), 今
や (nu) また (ouch) 1 年以上の歳月が (über des jâres zil)
過ぎていた (was ez) (*Parzival* 57, 29)

オランダ語の話し言葉にもあり, (133)①は規範例, ②が中間配列である。
③④の語順はフランドル地方で好まれる (Verheyen 2010: 144)。③は上方域
と下方域の併存に似ており (zal₁ | moeten₂ afgebroken₄ worden₃), ④は定形
zal₁「だろう」に続いて語彙的要素 afgebro-ken₄「取り壊さ」を先置している
(zal₁ | [[afgebroken₄] [moeten₂ worden₃]])。

- (133) オ Ik ben bang dat het huis ①[zal₁ moeten₂ worden₃ afgebroken₄].
②[afgebroken₁ zal₁ moeten₂ worden₃].
③[zal₁ moeten₂ afgebroken₄ worden₃].
④[zal₁ afgebroken₄ moeten₂ worden₃].

私は (ik) 家が (het huis) [取り壊さ (afgebroken₄) れる (worden₃)
必要がある (moeten₂) だろう (= のではないか zal₁)] と (dat) 心配だ (ben bang)

6. 「定形性非対称」をめぐって

6-1. 西フリジア語の「en+第3不定詞 (命令形不定詞)」

枠構造と「定動詞第2位」による「定形性非対称」の原則には, じつは重

要な反例がある。その1つは、西フリジア語の「en+第3不定詞」または「en+命令形不定詞」であり、IPI-構文 (IPI-construction, IPI=ラ imperativus pro infinitivo) と呼ばれている (清水 2003: 763-772, 2006a: 712-722)。西フ en は語形的に英 and に対応する。これには副詞的な付加詞 (adjunct) としてはたらく「並列型」(134)と、動詞や名詞などの補部の役目を担う「従属型」(135)(136)がある。前者では、話法の助動詞など、話者の主観的感情・評価を表す要素が必要とされる(137)。

- (134) 西フ De polysje soe by him komme kinne {**en helje him op/om him op te heljen**}. 警察が (de polysje) [彼を (him) 連行するために (en helje~op/ om~op te heljen←op/helje) 彼のところに (by him) 来る (komme) かもしれない (soe~kinne)]

(De Waart 1971: 13f. 変更)

- (135) 西フ De polysje komt by him {***en helje him op/om him op te heljen**}. 警察が [彼を連行するために] 彼のところに来る (komt 現在形)

(ib. 4 変更)

- (136) 西フ It is de muoite wurdich [**en lês dit/(om) dit te lêzen**]. [これを (dit) 読むことは (en lês/(om)~te lêzen)] 努力の (de muoite) 価値がある (is wurdich) (De Haan/Weerman 1986: 96)

- (137) 西フ It idee {**en lis de Lauwersmar droech/(om) de Lauwersmar droech te lizzen**} is net alhiel nij. [ラウエルス湖を (de Lauwersmar) 干拓するという (en lis~droech/ (om)~droech te lizzen)] 考えは (it idee) それほど新しくない (is net alhiel nij)

(De Haan 1987: 26f. 変更)

(134)(135)「om+te-第2不定詞句」(~するために)のomは、使用が義務的で目的の意味を表す前置詞である。(136)(137)「(om)+te-第2不定詞句」(~すること)のomは、使用が任意の不定形補文標識(4-2末尾参照)であり、形容詞述語is wurdich「~の価値がある」の主語と名詞句it idee「考

え」の修飾成分になっている。第3不定詞は命令形（西フ *helje~op!* 連行しなさい/*lès!* 読みなさい/*lis~droech!* 干拓しなさい）と同形だが、命令の意味はなく、不定詞の役目を担っている。語形的に英 *and* に対応する *en* も並列接続詞とは言えず、不定詞標識のようである。そこで、不定詞句内の不定詞が変則的に第2位の左枠を占めることになり、「定形性非対称」の原理が崩れるのである。

この構文は、オランダ北東部のオランダ語低地ザクセン方言（オ *Nedersaksisch*）でも観察される（*SAND II* 2008: 38）。中期オランダ語や古フリジア語でも例証されるが（Hoekema 1958: 21-23）、命令形ではなく、不定詞であり、並列型に限られていた。20世紀まで「*en* + 不定詞」と「*en* + 命令形」が併用され、命令形の語形に替わったのである（Hoekstra 1997: 35）。その原因は、不定詞句内で不定詞を先頭に置くのは特殊な語順なので、不定詞と命令形が同形で派生動詞に用いる生産的な「*je*-動詞」にならって、不定詞の代わりに命令形を援用して、通常の無標の語順に変えた結果と言われている（Van der Meer 1975: 28）。

古フリジア語期の並列型に加えて、従属型が発達した理由は、不定詞から命令形に転換した結果、本来の並列接続詞 *en* に続く動詞句が先行する動詞句から独立性を獲得し、並列句から従属句に変わったためとされている（Hoekstra 1997: 37）。次の例文を見てみよう。（138）「*en* + 命令形」と（139）「*en* + 第3不定詞」の関連が納得できるだろう。

- (138) 西フ *Wy riede dy oan [en jou do heit in strik]* (*en dan jouwe wy him sigaren*). 私たちは (*wy*) 君に (*dy*) 忠告します (*riede~oan*) : [それで (*en*) 君が (*do* 命令形主語) お父さんに (*heit*) ネクタイを (*in strik*) あげなさい (*en jou* 命令形←*jaan* 与える)] (そうしたら (*dan*) 私たちが (*wy*) 彼に (= お父さんに *him*) 葉巻を (*sigaren*) あげるから (*jouwe*)) (Hoekstra 1997: 41 変更)
- (139) 西フ *Wy riede dy oan [en jou heit in strik]*. 私たちは君に [お父さんにネクタイをあげることを (*en jou* 第3不定詞)] 忠告します

そもそも定形と不定形には、一義的に峻別できない点があり、動詞の定形性には段階が認められる可能性がある。西フリジア語では、主節の定動詞は「時制」と人称・数の「一致」を示し、第2位を占める典型的な定形である。一方、人称の「一致」だけを示して、第2位に出現するのが同言語の命令形であり、定形としてはやや特殊である。現在形や過去形と違って、命令形は右枠にも現れない。「en+第3不定詞」はさらに特殊であり、「時制」も「一致」も示さず、右枠にも置かれない。それでも、並列型では話法の助動詞が必要のように、定形性を帯びることがある。「en+第3不定詞」は、例外的に第2位を占める特殊な不定形と言えよう。

6-2. 西フリジア語の dat-主節、「埋め込み節の定動詞第2位」

「定形性非対称」には、もう1つ重要な反例が挙げられる。西フリジア語の dat-主節がそれである。西フリジア語には2つの接続詞 dat 「～ということ」があり、(140) dat-主節（定動詞第2位）と(141) dat-従属節（定動詞末尾）に分かれる。dat-主節は、架橋動詞（bridge verb）と呼ばれる発言・思考動詞（例：西フ sizze 言う, tinke/leauwe 思う）に導かれた肯定文であり、話法の助動詞を含まない場合に用いる。dat を欠く主節だけでもかまわない(140)。ただし、否定文では dat-主節は使えない(141)。発言の引用的性格が強いと言える。一方、dat-従属節は否定文でもよく（(114) (115) 参照）、動詞の種類にも制限はない。ドイツ語の dass 「～ということ」は従属接続詞であり、dat-従属節だけに対応する(142)。dat-主節にあたるド dass は存在しない。ドイツ語の発言・思考動詞の一覧は Helbig/Buscha (1994¹⁶: 646f.) 参照。

(140) 西フ Ik leau [*dat do* [dɔ'do:(u)]/Ø *do*] *kinst* dat sizze]. 私は (ik) 君が (do) それを (dat) 言える (kinst~sizze) と (dat/Ø) 思う (leau←leauwe)

(141) 西フ Ik leau net [**dat do* [dɔ'do:(u)]/**Ø do*] *kinst* dat sizze]. 私は君

がそれを言えるとは思わない (leau net)

- (142) ド Ich glaube nicht, [**dass/Ø*] du **kannst** das sagen/**dass** du das sagen **kannst**]. 同上

西フリジア語の dat-主節は結果節「～なので～だ」/「そこで」でも用い、dat には語彙的意味が認められる。とくに(144)はそうである(清水 2003: 407-414, 2006a: 376-381)。

- (143) 西フ Wy wiene sa benaud, [*dat/Ø*] de knibbels **staten** ús **oan/dat** de knibbels ús **oanstaten**. 私たち (wy) はとても (sa) 怖かった (wiene~bernaud) ので (そのため (dat/Ø)) 膝が^s (de knibbels~ús) 震えた (staten~oan/oanstaten←oan|stjitte)

(Hoekstra/Tiersma 1994: 524)

- (144) 西フ **Dat** sadwaande **gie** ik op ûndersyk **út**. そこで (dat) そのようなわけで (sadwaande) 私は (ik) 偵察に (op ûndersyk) 出かけた (gie~út←út|gean)

(Bosma-Banning 1981²: 34)

西フリジア語の dat-主節は「埋め込み節の定動詞第2位」(embedded verb-second)と呼ばれ、「定形性非対称」に反している。間接話法に似た発言の引用の性格が強く、この dat は語彙的意味を帯びることもあり(143)(144)、典型的な無標の補文標識から逸脱している。前節で述べた動詞の定形・不定形の区別に関する問題のように、補文標識にも補文を導く役目に段階がありそうである。

架橋動詞による上記の現象は、北ゲルマン語でも観察される⁹。(145)~(149)のデンマーク語の例を検討しよう。基本的な意味は、「イエンス(男名)がこの本を(denne bog)読まなかった(har ikke læst, 英 has not read)と(at, 英 that)(彼女は(hun)言っている(siger))」である(Vikner 1995: 67,

⁹ アイスランド語では、架橋動詞以外にもこの現象が見られる(Vikner 1995: 65-80)。

Thráinsson 2007: 43)

- デ 前域 左 枠 [中域] 右 枠 [後域]
- (145) Jens **har** [_____ ikke] _____ **læst** [denne bog].
- (146) Denne bog **har** [Jens ikke] _____ **læst** [_____].
- (147) (Hun siger) {*at*/Ø} [Jens ikke] **har læst** [denne bog].
- (148) (Hun siger)
- {*at*/^{??}Ø} Jens **har** [_____ ikke] _____ **læst** [denne bog].
- (149) (Hun siger)
- {*at*/^{*}Ø} denne bog **har** [Jens ikke] _____ **læst** [_____].

(145) (146)の主節は, (147)の従属節から VO 型枠構造と「定動詞第 2 位」によって導かれる。ところが, (148) (149)の補文標識 *at* (英 *that*/ド *dass*) に続く節は, (145) (146)の主節と同じ語順である。これは 2-3 で扱った「埋め込み節の話題化」の例である。ドイツ語では, この場合も *dat*-従属節の語順を示す。しかも, 目的語を話題化した(149)では, 補文標識 *at* は欠かせず, 主語を話題とした(148)も補文標識 *at* がなくては不自然である (Thráinsson 2007: 43)。このように, (148) (149)は西フリジア語の *dat*-主節に準じて, 「埋め込み節の定動詞第 2 位」を示す変則的なケースなのである。

次のスウェーデン語, ニューノシュク, フェーロー語の例も同様である。たとえば, (150)から補文標識 *att* を除けば, ス ***Den boken har*** Maria ännu inte läst. 「その本はマリーアはまだ読んでいない」という主節の語順が得られる¹⁰。以上のように, 「定形性非対称」の原則には, 2 本の重い横槍が控えているのである。

- (150) ス Jag tror [***att den boken har*** Maria ännu inte läst]. 私は (jag) そ

¹⁰ 母型動詞 (デ *siger* 言っている) が補文標識句 (CP) としての従属節を支配しているとみなす分析 (CP-recursion) もある (Vikner 1995: 67, De Haan/Weerman 1986: 86)。

の本は (den boken) マリーアが^s (Maria) まだ (ännu) 読んでいない (har~inte läst, 英 has~not read) と (att) 思う (tror)

(Faarlund 2019: 241)

- (151) ニ Ho sa [**at neste gong så kunne** ho ikkje komme]. 彼女は (ho) 次回は (neste gong) そういうわけで (så) 来られないだろう (kunne~
ikkje komme, 英 could~not come) と (at) 言った (sa)

(ib. 241)

- (152) フ E g haldi, [**at grind hefur** hann ongantið etið]. 私は (eg) クジラの肉は (grind) 彼は (hann) 一度も (onggantið 否定) 食べたことか^s (hefur~etið, 英 has~eaten) ないと (at) 思う (haldi)

(Thráinsson et al. 2004: 297)

参考文献

- Árnason, Mörður (útg.) (2003²) *Íslensk orðabók*. Reykjavík: Edda.
- Baur, Arthur (1997¹¹) *Schwyzertüütsch*. Winterthur: Gemsberg.
- Bech, Gunnar (1983² (1955/57)) *Studien über das deutsche Verbum infinitum*. Tübingen: Niemeyer.
- Bibel* (1989²) Haarlem: Nederlands Bijbelgenootschap/Boxtel: Katholieke Bijbelstichting.
- Bibelen* (1986³) Oslo: Bibelselskapets Forlag.
- Bibelen* (1987⁴) Oslo: Bibelselskapets Forlag.
- Bibelen* (1998) København: Det Danske Bibelselskab.
- Bibeln* (1981/82) Stockholm: Svenska Bibelsällskapet.
- Biblia* (1983) Keyptmannahavn: Det Danske Bibelselskab.
- Biblian* (2007) Reykjavík: Hið íslenska biblíufélag.
- Bidese, Ermenegildo (2008) *Die diachronische Syntax des Zimbrischen*. Tübingen: Narr.
- Bijbel: Het Nieuwe Testament* (1926) London: Britsche en buitenlandse Bijbelgenootschap.
- Bosma-Banning, A. (1981²) *Bûter, brea en griene tsiis. Grammofoanplatekursus Frysk*. Ljouwert: Afûk.
- Brunner, Jean-Jacques (2001) *L'alsacien sans peine*. Chennevières-sur-Marne Cedex: Assimil.
- Clemens, Peter Michael (2008 (1870 完成)) *Die vier Evangelien auf Sylterfriesisch* (Hrsg.

- Hindrik Brouwer). Kil/Kiel: *Estrikken/Ålstråke* 83.
- Cognola, Federica (2013) *Syntactic Variation and Verb Second. A German Dialect in Northern Italy*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Dal, Ingerid/Eroms, Werner (2014⁴) *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Berlin/Boston: De Gruyter.
- Dåt Evangelium fon Mattäus aw mauringer-frasch* (1955) Flensburg Avis.
- De Haan, G. J. (1987) De *en* + ympoeratyf. Yn: Dyk/Hoekstra (útj.). 24-31
- De Haan, Germen/Weerman, Fred (1986) Finiteness and Verb Fronting in Frisian. In: Haider, Hubert/Prinzhorn, Martin (eds.) *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*. Dordrecht/Riverton: Foris. 77-110.
- De Haan, Rienk (2006) *Fries voor zelfstudie*. Utrecht: Prisma.
- De Plattduitsche Baibel. (Ostfälsch von Friedrich Wille)* (1997) Einbeck: Scheele-Druck Einbeck.
- De Rooy, J. (1965) *Als-of-dat. Enkele conjuncties in ABN, dialect en Fries*. Assen: Van Gorcum.
- De Waart, A. A. J. (1971) Constructies met *en* + “imperatiefzin” in het moderne Westerlauwerse Fries. In: *Stúdzjekonferinsje Frysk*. Ljouwert. 3-31.
- D’Evangelium nom Matthäus (D’Bibel op Lëtzebuergesch)* 2018 Luxembourg: Äerzbistum.
- Diderichsen, Paul (1976³ (1946)) *Elementær dansk grammatik*. København: Gyldendal.
- Diderichsen, Paul (1982⁵ (1964)) *Essentials of Danish Grammar*. Copenhagen: Akademisk Forlag.
- Die Bibel* (1984) Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft.
- Die Bybel* (2007¹⁶) Bellville: Bybelgenootskap van Suid-Afrika.
- Donaldson, Bruce C. (1993) *A Grammar of Afrikaans*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Donaldson, Bruce (2008²) *Dutch. A Comprehensive Grammar*. London/New York: Routledge.
- Dyk, Siebren/Hoekstra, Jarich (útj.) (1987) *Ta de Fryske syntaksis*. Ljouwert: Fryske Academy.
- Einarsson, Stefán (1949²) *Icelandic*. Baltimore/London: The Johns Hopkins University Press.
- Es Nei Teshtament* (1993) Van Dam Road South Holland: The Bible League.
- Faarlund, Jan Terje (2019) *The Syntax of Mainland Scandinavian*. Oxford: Oxford University Press.
- Fleischer, Wolfgang (1976⁴) *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Leipzig: Bibliographisches Institut.

- Fríðjónsson, Jón (1978) *A Course in Modern Icelandic*. Reykjavík: Tímaritið Skák.
- 『言語学大辞典第6巻術語編』(亀井 孝/河野六郎/千野栄一 編著) (1996) 三省堂
- Groot Nieuws Bijbel* (1999) Haarlem/'s-Hertogenbosch: Nederlands Bijbelgenootschap/Katholieke Bijbelstichting.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (1994¹⁶) *Deutsche Grammatik*. Leipzig et al.: Langenscheidt/Verlag Enzyklopädie.
- Hoekema, Teake (1958) In spesifyk Frysk syntagme. *Us Wurk* 7. 17-23.
- Hoekstra, Jarich (1997) *The Syntax of Infinitives in Frisian*. Ljouwert: Fryske Akademy.
- Hoekstra, Jarich/Tiersma, Peter Meijes (1994) Frisian. In: König/Van der Auwera (eds.) 505-531.
- König, Ekkehard/Van der Auwera, Johan (eds.) (1994) *The Germanic Languages*. London/ New York: Routledge.
- Musan, Renate (2010) *Informationsstruktur*. Heidelberg: Winter.
- 中尾俊夫/児馬 修 (1997³) 『歴史的にさぐる現代の英文法』 大修館書店
- Pafel, Jürgen (2011) *Einführung in die Syntax*. Weimar: Metzler.
- Paul, Hermann (1959⁵) *Deutsche Grammatik. Bd. IV*. Halle (Saale): Niemeyer.
- Popkema, J. (1979) As alle assen iene wiene. *It Beaken* 41. 259-290.
- Putnam, Michael T. (2011) *Studies on German-Language Islands*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Radford, Andrew/Atkinson, Martin/Britain, David/Clahsen, Harald/Spencer, Andrew (2009²) *Linguistics. An Introduction*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Rijpma, E./Schuringa, R. G. (1978^{2b}) *Nederlandse spraakkunst*. Wolters-Noordhoff: Groningen.
- SAND I* (*Syntactische atlas van de Nederlandse dialecten. Deel 1 /Syntactic Atlas of the Dutch Dialects. Volume I + Commentary*). Barbiere, Sjef/Bennis, Hans/De Vogelaar, Gunther/Devos, Magda/Van der Ham, Margreet (2005) Amsterdam: Amsterdam University Press.
- SAND II* (*Syntactische atlas van de Nederlandse dialecten. Deel II/Syntactic Atlas of the Dutch Dialects. Volume II + Commentaar*). Barbiere, Sjef/Bennis, Hans/De Vogelaar, Gunther/Devos, Magda/Van der Ham, Margreet (2008) Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Sapp, Christopher D. (2011) *The Verbal Complex in Subordinate Clauses from Medieval to Modern German*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- 関口存男 (1994) 「伯林訛雑考(2)」『関口存男生誕 100 周年記念著作集 別巻ドイツ語学論集』三修社. 355-357. (『獨文評論』1934 年 11 月号 62-64)
- Shannon, Thomas F. (2000) On the Order of (Pro) nominal Arguments in Dutch and German. In: Shannon, Thomas F./Snapper, Johan P. (eds.) *The Berkeley Conference on*

- Dutch Linguistics 1997*. Lanham: University Press of America. 145-196.
- 清水 誠 (2003) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述とゲルマン語類型論構築のための基礎的研究』(論文博士学位請求論文) 北海道大学
- 清水 誠 (2004) 『現代オランダ語入門』 大学書林
- 清水 誠 (2006) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』 北海道大学出版会
- 清水 誠 (2012) 『ゲルマン語入門』 三省堂
- 清水 誠 (2019) 「ドイツ語から見たゲルマン語—名詞の性、格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』 158. 37-76.
- 清水 誠 (2020) 「ドイツ語から見たゲルマン語(2)—属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』 160. 37-96.
- 清水 誠 (2021a) 「ドイツ語から見たゲルマン語(3)—名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』 162. 35-101.
- 清水 誠 (2021b) 「ドイツ語から見たゲルマン語(4)—冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』 163. 1-22.
- 清水 誠 (2021c) 「ドイツ語から見たゲルマン語(5)—人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』 164. 19-41.
- 清水 誠 (2021d) 「ドイツ語から見たゲルマン語(6)—3人称代名詞, 再帰代名詞, 所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』 165. 31-60.
- 清水 誠 (2022a) 「ドイツ語から見たゲルマン語(7)—2人称代名詞と関連表現」『北海道大学文学研究院紀要』 166. 1-27.
- 清水 誠 (2022b) 「ドイツ語から見たゲルマン語(8)—不定詞と分詞」『北海道大学文学研究院紀要』 167. 1-30.
- 清水 誠 (2022c) 「ドイツ語から見たゲルマン語(9)—動詞の強変化と弱変化, ウムラウト, 人称語尾」『北海道大学文学研究院紀要』 168. 1-35.
- 清水 誠 (2022d) 『ゲルマン語歴史類型論』 北海道大学出版会
- 清水 誠 (2023a) 「ドイツ語から見たゲルマン語(10)—強変化動詞, 過去現在動詞, 母音交替」『北海道大学文学研究院紀要』 169. 1-39.
- 清水 誠 (2023b) 「ドイツ語から見たゲルマン語(11)—過去形と完了形: 時制, アスペクト, 話法」『北海道大学文学研究院紀要』 170. 1-33.
- 清水 誠 (2023c) 「ドイツ語から見たゲルマン語(12)—進行形と不在構文(付: 正誤表)」『北海道大学文学研究院紀要』 171. 1-38.
- 新谷俊裕/Thomas Breck Pedersen/大辺理恵 (2014) 『デンマーク語』 大阪大学出版会
- s Nöi Teschtamänt Züritüütsch* (1997) Zürich: Jordan-Verlag.
- Svensk ordbok A-L (utgiven av Svenska Akademien)* (2009) Stockholm: Norstedts.
- Thies, Heinrich (2011²) *Plattdeutsche Grammatik*. Neumünster: Wachholtz.

- Thráinsson, Höskuldur (1994) Icelandic. In: König/Van der Auwera (eds.) 142-189.
- Thráinsson, Höskuldur (2007) *The Syntax of Icelandic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thráinsson, Höskuldur/Petersen, Hjalmar P./Jacobsen, Jógvan í Lon/Hansen, Zakaris Svabo (2004) *Faroese*. Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag.
- Van Dam, Jan (1972) *Syntax der deutschen Sprache*. Groningen: Wolters-Noordhoff.
- Van der Meer, Geart (1975) The imperativus pro infinitivo reconsidered. *Us Wurk* 24. 19-34.
- Van der Meer, Willy (2009) *Basiskursus Frysk*. Ljouwert: Afûk.
- Van der Wouden, Ton (2009³) Partikels: woordjes die het Nederlands markeren. In: Van der Sijs, Nicoline/Stroop, Jan/Weerman, Fred (red.) *Wat iedereen van het Nederlands moet weten en waarom*. Amsterdam: Bert Bakker. 119-129.
- Van Ginneken, J. (1939) De vervoeving der onderschikkende voegwoorden en voornaamwoorden. *Onze Taaltuin* 8. 1-11.
- Van Haeringen, C. B. (1962² (1939)) Congruerende voegwoorden. (再録 *Neerlandica*. 246-259).
- Van Haeringen, C. B. (1962²) *Neerlandica*. Den Haag: Daamen N. V.
- Verheyen, Rob (2010) *Precies ! Lern- und Übungsgrammatik Niederländisch. Band 2*. Hamburg: Buske.
- Vikner, Sten (1995) *Verb Movement and Expletive Subject in the Germanic Languages*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Vikner, Sten (2017²) Object Shift in Scandinavian. In: Everaert, Martin/Van Riemsdijk, Henk (eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Syntax. Vol. V*. 2784-2843.
- Wöllstein-Leisten, Angelika (2001) *Die Syntax der dritten Konstruktionl*. Tübingen: Stauffenburg.
- Wöllstein, Angelika (2010) *Topologisches Satzmodell*. Heidelberg: Winter.
- Wurmbrand, Susi (2004) West Germanic Verb Clusters. In: Kiss, Katalin É./Van Riemsdijk, Henk (eds.) *Verb Clusters. A Study of Hungarian, German and Dutch*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins. 43-85.

正誤表 2

前稿末尾の正誤表の補足として、誤植・誤記の訂正を記す（「誤＞正」の順）。

- * 「ドイツ語から見たゲルマン語 (6) 一人称代名詞, 再帰代名詞, 所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』165 (2021: 31-60)
- p.36 下から 7 行目 : et/dât > dât (2 箇所)
- p.36 下から 6 行目 : et/hat > hat, ham/et > ham (2 箇所)

ドイツ語から見たゲルマン語 (13)

- * 「ドイツ語から見たゲルマン語 (9)―動詞の強変化と弱変化, ウムラウト, 人称語尾」
『北海道大学文学研究院紀要』168 (2022: 1-35)
 - p. 4 下から7行目: -an の -a > fa- の a
 - p. 6 下から12行目: 第2次ウムラウト > その他の第2次ウムラウト
 - p. 16 上から6行目: *hīp*(e)t > *hīp*(e)p
 - p. 16 上から6, 8行目: iç > ic̥
 - p. 17 上から1行目: i<e/u_ > i<e/_u
 - p. 21 上から14行目: bet/malede, malte > bed/malede, malte
- * 「ドイツ語から見たゲルマン語 (10)―強変化動詞, 過去現在動詞, 母音交替」『北海道大学文学研究院紀要』169 (2023: 1-39)
 - p. 11 下から1行目: ゲ * ou > ゲ * au
 - p. 15 上から2行目: *nāmum*←*niman/neman* > *nāmum*←*niman*
 - p. 16 下から7行目: (←*mā*βen [a:]) > (<*mā*βen [a:])
下から3行目: (←*sā*βen [a:]) > (<*sā*βen [a:])
- * 「ドイツ語から見たゲルマン語 (11)―過去形と完了形: 時制, アスペクト, 話法」『北海道大学文学研究院紀要』170 (2023: 1-33)
 - p. 17 上から1行目: *makiat* (h)/-et (h) > *makiat* (h)/-iet (h)
- * 「ドイツ語から見たゲルマン語 (12)―進行形と不在構文」『北海道大学文学研究院紀要』171 (2023: 1-38)
 - p. 10 上から2行目: *vera* > *være*
 - p. 14 上から2行目: 連結要素 > 接合要素
 - p. 16 下から11行目: 連結要素 > 接合要素
 - p. 31 下から13行目: *vara* (英 be) > *gå* (英 go)

